特100
927

新譯國文叢書

古事記

全

吉川文學士編

洋社
274
631

始

特100
927

新譯國文叢書

第五編

古事記

全

文學士 吉川秀雄編

編輯顧問 文學博士 芳賀矢一

大正
3. 10. 29
内交

天の岩戸

解題

古事記は我が國開闢のはじめから、第三十四代推古天皇の御代に至るまでの間のことを書いた我が國最古の歴史で、奈良朝のはじめに出來た。新文化が次第に輸入さるゝに從つて、古來の傳說遺聞が散佚するおそれがあつたのと、今一つは支那と交渉するのに、一の歴史をも持たぬのは國家としてはづかしいことであるといふ考へもあつて、この歴史は出來たのである。その序文によると、天武天皇の思召で、稗田阿禮といふものに、舊記傳說を誦み習はしめられた。この阿禮は甚だ聰明で、且博聞强記の人であつた。その後史臣太安萬侶が、元明天皇の命を受けて、阿禮の口誦を筆記したのが即ち本書である。本書の出來たのは和銅五年で、後八年日本書紀が出來た。日本書紀は、古事記が力めて國語のまゝに寫してあることが、支那崇拜の時代の人には慊らず思はれた爲に、純粹の漢文で書いたのである。しかし今では漢文で書いた書紀は古意を損ずることが多いとして、むしろ古事記の方を重んずるのである。

記紀の二書は我が國の最初の正史と見られてあるが、これは正史といふよりも神話傳說と見るべきで、勿論事實の骨はあらうが、また國民の想像から生れ出た肉がついてゐることを忘れてはならぬ。要するに國民思想の結晶で、國民性の淵源を探るには是非本書を見ねばならぬ。

古事記の文章は、勿論筆者安麻侶の意も加はつてゐるであらうが、大體に於いて古來人の口から口に傳誦し來つたまゝを寫さうと力めたらしい。須佐之男命の昇天の條の如き、或は天のいはやどの條の如きは、殊に著しい。いはゞ太古の叙事詩とも見ることが出來よう。歌なども、本來のまゝのものでなくて、傳誦の間に變遷したものであることは、異なる人の異なる場合の歌に同じ文句の出て來るのでもわかる。要するに古事記は內容の一部が國民の想像から生れた如く、文章も亦國民の詞藻の發現と見る事が出來る。その莊重にして雄健なることは、蓋し我が國文學の誇とするに足るものであらう。

大正三年十月七日

編者識

新譯國文叢書の發刊に就て

梗概叢書の發行は出版界近時の流行なり。されど、その多くは泰西文學の飜譯にして、中には必ずしも、不健全なる思想を鼓吹せるものなしとはいふべからず。且夫れ物には次第あり。泰西文學の一端をも窺はんとするものは、必ずまづ我が古文學を知らざるべからず。我が古文學の何たるをも解せずして泰西文學を味はんとす、こゝに於てか徒らに新を求め奇を趁ひ、はやくも本を忘れて末に趨り、往々危險なる思想にかぶるゝものさへあるを致せり。

是れ職として我古文學の書が、多くは難澁にして、解し易からず、一般人士をして、自ら古文學書に遠ざからしむるに至れるが故なり。

余茲に鑑る所あり、我が古文學の萃を拔き、斯道の大家に囑し、之が梗概を記し、或は語を逐うて口語に譯し、以て新譯國文叢書を

成し、一般人士の讀誦に供し、一は以て國民性の涵養に資し、一は以て清き娯樂の資たらしめんとす。

江湖諸彦乞ふ幸に余が微衷を諒せられんことを。

大正三年九月

發行者　石黒專之助白す

新譯

古事記

文學士　吉川秀雄編

神代

天地がはじめて開けた時、高天の原にお生れなさつた神は天之御中主神、次に高御産巣日神、次に神産巣日神である。皆獨身で、目で見ることの出來ぬ神である。

次に、國がまだわかくて、浮いた脂のやうに、また海月のやうに漂うてゐる時に、葦の芽のやうに萌え出たものからお生れなさつた神は宇麻志阿斯訶備比古神、次に天之常立神である。これも皆獨身、目で見えぬ神である。さて以上の五柱の神を別天神といふ。

次にお生れになつた神は國之常立神、次に豐雲野神である。これもまた獨身

で、目で見えぬ神である。

次にお生れなさつた神は宇比地邇神、次に妹須比智邇神、次に角杙神、次に妹活杙の神、次に意富斗能地神、次に妹意富斗能辨神、次に淤母陀琉神、次に妹阿夜訶志古泥神、次に伊邪那岐神、次に妹伊邪那美神である。國之常立神から伊邪那美神までを神代七代といふ。右の内、上の二柱の神は獨身で各一代、次の十神は二柱づゝ御夫婦で、二柱をあはせて一代と數へるのである。

そこで、諸の天神は伊邪那岐命、伊邪那美命に、この漂うてゐる國をつくり固めよと命ぜられて、天沼矛を渡された。よつて二柱の神は天浮橋の上にお立ちになつて、その沼矛をさしおろして搔き廻されると、ころ〳〵と音がした。さて矛を引きあげなさる時に、その矛の先からしたゝる潮が凝り固つて島となつた。これが磤馭盧島(淡路の沼島)である。

二神はこの島に下りて、天之御柱を立てて、八尋殿を作られた。そこで伊邪那岐命は女神にむかつて、「お前の體はどう出來あがつたか、」と尋れられた。伊

邪那美命答へて、「私の體には足りない所が一つあります、」と答へられた。男神は、「おれの身には餘計な所が一つある。今わが身の餘計な所で、お前の足りない所を塞いで國を生まうと思ふがどうぢや、」と仰せられると、女神は、「それはよろしうございませう、」と答へられた。そこで男神は天之御柱を左から廻り、女神は右から廻つて、兩方お出逢ひなさつた時に、女神はまづ、「あゝ美しい男よ、」といはれ、次に男神は、「あゝ美しい女よ、」と仰せられた。その時男神は「女を先にしてはいけなかつた、」と仰せられた。しかし二人寢所に入つて、水蛭子を生まれた。この御子は葦の船に入れて流し棄てられた。次に淡島を生まれたが、これも御子の數には入らない。

そこで二神は相談して、天神の御許に行つて、「どうもよい子が生れませぬがどうしたものでございませう、」と尋れられた。天神は布斗麻邇卜に占はせて後、「それは女を先にした爲だ、今一度やり直して見よ、」と仰せられた。

よつて二神は再び磤馭盧島に降つて、先の如く天之御柱を廻り、今度は男神

の方が先に、「あゝ美しい女よ、」といはれ、次に女神が「あゝ、美しい男よ、」といはれた。さて寢所に入つて、淡道之穗之狹別島（淡路）を生まれた。次に伊豫之二名島、（四國）を生まれた。この島は身一つで、顏が四つある、伊豫國を愛比賣といひ、讃岐國を飯依比古といひ、阿波國を大宣都比賣といひ、土佐國を建依別といふ。次に隱伎之三子島、（隱岐）を生まれた。この島は又の名を天之忍許呂別といふ。次に筑紫島（九州）を生まれた。この島も亦身一つで顏が四つある。筑紫國を白日別、豐國を豐日別、肥國を建日向日豐久士比泥別、熊曾國を建日別といふ。次に壹岐島を生まれた。この島はまたの名を天比登都柱といふ。次に津島（對馬）を生まれた。またの名を天之狹手依比賣といふ、次に佐渡島を生まれた。次に大倭豐秋津島、（本土）を生まれた。またの名を天御虛空豐秋津根別といふ。以上八つの島をあはせて大八島國といふ。

さて以上八つの島を生み廻つて再び磯馭盧島に歸つて、吉備の兒島を生まれた。またの名を建日方別といふ。次に小豆島を生まれた。またの名を大野手比

賣といふ。次に大島を生まれた。またの名を大多麻流別といふ。次に女島を生まれた。またの名を天一根といふ。次に値嘉島を生まれた。またの名を天之忍男といふ。次に兩兒島を生まれた。またの名を天兩屋といふ。

すでに國を生んでしまはれたので、今度は神を生まれる。まづ大事忍男神、次に石巢比賣神、次に大戸日別神、次に天之吹男神、次に大屋毘古神、次に風木津別之忍男神、次に海の神、その名は大綿津見神、次に水戸の神、その名は速秋津日子神、次に妹速秋津比賣神を生まれた。

この男女の水戸の神が、ひとりは河の方、ひとりは海の方を各受持つて生まれた神々は、沫那藝神、沫那美神、頰那藝神、頰那美神、天之水分神、國之水分神、天之久比奢母智神、國之久比奢母智神などである。

伊邪那岐、伊邪那美の二神は、次に風の神、その名は志那都比古神、次に木の神、その名は久久能智神、次に山の神、その名は大山津見神、次に野の神、その名は鹿屋野比賣神、またの名は野椎神を生まれた。

この大山津見神と野椎神とが、各野と山とを受持つて生まれた神々は、天之狹土神、國之狹土神、天之狹霧神、國之狹霧神、天之闇戸神、國之闇戸神、大戸惑子神、大戸惑女神などである。

伊邪那岐、伊邪那美の二神は、次に鳥之石楠船神、またの名は天之鳥船、次に大宜都比賣神、次に火之夜藝速男神、またの名は火之炫毘古神、今一つの名は火之迦具土神を生まれた。この御子をお生みになつた時、女神は陰部が燒けて御病氣になられた。その時の嘔吐からお生れなさつた神は金山毘古神、金山毘賣神、次にその糞からお生れなさつた神は波邇夜須毘古神、波邇夜須邪賣神次に尿からお生れなさつた神は彌都波能賣神、和久產巢日神などである。和久產巢日神の御子を豐宇氣毘賣神といふ。伊邪那美神は火の神をお生みになつたために到頭お隱れになつた。

伊邪那岐神は「可愛の妻よ、子供一人の爲に最愛の妻を失うた、」といひながら、御骸の枕邊に伏し、足元に伏してお泣きになつた。その御涙からお生れな

さつたのが、香山の畝尾木本にゐられる泣澤女神である。伊邪那美神は出雲と伯耆との境にある比婆之山(比布山)に葬り奉つた。

伊邪那岐神は佩いてゐられた十拳劍を拔いて迦具土神の頸を斬られた。その劍の先についた血が澤山群つてゐる石に飛び散つて、それから石析神、根析神石筒之男神がお生れになり、劍の本についた血も同じく飛び散つて甕速日神、樋速日神、建御雷之男神、またの名は建布都神、今一つの名は豐布都神などがお生れになり、次に劍の柄についた血が指の間から洩れて、闇游加美神、闇御津羽神がお生れなさつた。

殺されなさつた迦具土神の頭から正鹿山津見神、胸から淤縢山津見神、腹から奥山津見神、陰部から闇山津見神、左の手から志藝山津見神、右の手から羽山津見神、左の足から原山津見神、右の足から戸山津見神がお生れになつた。劍の名を天之尾羽張、またの名を伊都之尾羽張といふ。

伊邪那岐命は妻の伊邪那美命に逢はうと黃泉國に行かれた。女神戸を開けて

これを出迎へられる時に、男神、「お前と國を作つたが、まだ充分に作つてしまつてゐないから、今一度還つてお出で、」と仰せられると、女神は、「早く來て下さればよかつたのに、もう私は黃泉國の火で煮た物を食べて穢れました。併し折角來て下さいましたから、黃泉の神と相談をして見ませう。しばらく待つて下さいませ。その間決してお覗きなさつてはいけませんよ、」といつて殿の內にはいつてしまはれた。それから久しいこと時が經つても何の沙汰もないので、男神は待ちかねて、左の角髮にさしてゐられた櫛を闕いて火を點して見られると、女神の御身には蛆がたかつて、頭、胸、腹、陰部、右左の手、右左の足から、あはせて八つの雷が生れ出てゐる。

男神これを見て驚き怖れて逃け歸られると、女神、あなたは私に耻を搔かせなさつた」といつて、黃泉國の邪神に命じて追ひかけさせられる。そこで男神鬘を取つて投げ棄てられると、蒲子が生つた。邪神ども之を食うてゐる間に逃げられると又追ひかけて來る。そこで今度は櫛を缺いて投げられると、笋が

出來た。これを食うて居る間に逃げられた。今度は八つの雷神に、大勢の黃泉の軍兵を從へさして追はせられた。男神は十拳劍を拔いて後の方に打ち振りながら逃げられるのを、猶追ひかけて、この世と黃泉國との堺にある黃泉平坂迄來た時、坂の下にある桃の實を三つ投げられると皆逃け去つてしもふ。男神はその時桃の實に向つて、「今おれを助けた樣に、葦原中國に困つた人民がある時に助けて呉れ、」と仰せられて、意富加牟豆美命といふ名を下された。

最後に、女神は自ら追ひかけて來られた。男神は千引石で坂路を塞いで、その石を中にしてふたり向ひ立ちて、離緣のいひ渡しをされると、女神は、「あなたがそのやうなことをなさると、私はあなたの國の人民を一日に千人宛絞め殺しますぞ、」といはれる。男神は答へて、「もしお前がそのやうなことをすると、私は一日に千五百人の子を生れさせう、」と仰せられた。これから一日の中に必ず千人死に、一日の中に必ず千五百人生るゝことになつたのである。伊邪那美命を黃泉津大神といひ、黃泉坂を塞いだ石を道反神といふ。その黃泉平坂は、

今の出雲の伊賦夜坂だといふ。

伊邪那岐命は「あゝ穢い、穢しい國に行つて、おれの體は汚れた、」と仰せられて、竺紫の日向の橘小門の憶原に行つて禊祓をされた。その投げ棄てられた杖から衝立船戸神、帶から道之長乳齒神、裳から時置師神、衣から和豆良比能宇斯能神、褌から道俣神、冠から飽咋之宇斯能神、左の御手の環から奥疎神、奥津那藝佐毘古神、奥津甲斐辨羅神、右の御手の環から邊疎神、邊津那藝佐毘古神、邊津甲斐辨羅神がお生れになつた。

そこで上瀨は瀨が早い、下瀨は瀨が弱いと仰せられて、中瀨に下りて身を洗ひ清められた時、八十禍津日神、大禍津日神がお生れになつた。この二神は汚れの多い國に行かれたその汚れからお生れになつたのである。次にその汚を直すために、神直日神、大直日神、伊豆能賣神がお生れになつた。次に水の底で滌がれた時に底津綿津見神、底筒之男命、水の中程で滌がれた時に中津綿津見神、中筒之男命、水の上で滌がれた時に上津綿津見神、上筒之男命がお生れに

なつた。この三柱の綿津見神は阿曇連の祖神である。また三柱の筒之男命は攝津の住吉の三神であらせられる。

さて左の目をお洗ひになつた時天照大御神、右の目をお洗ひになつた時月讀命、鼻をお洗ひになつた時に建速須佐之男命がお生れになつた。

この時伊邪那岐命は殊の外喜んで、「おれはおほくの子を生んだが、お終ひに三人の立派な子を得た、」と仰せられて、頸飾の珠をゆら〳〵と動しながら、天照大御神に下し賜つて、「お前は高天原を治めよ、」と仰せられた。次に月讀命には、「お前は夜の國を治めよ、」と仰せられ、次に建速須佐之男命には海原を治めよと仰せられた。

天照大御神と月讀命とは父の命に從はれたが、須佐之男命は命ぜられた國を治めずに、小兒のやうに足摺をして泣かれた。あまりに泣かれたので、そのために青山は泣き枯され、海河は泣き乾されてしまうた。その爲惡神どもの騷ぎ起つ聲が五月の蠅の騷ぐが如く喧しく起り、また色々の禍が起つた。そこで伊

邪那岐神は須佐之男命に向つて、「お前は何故におれのいふことを聞かずにその樣に泣くのだ、」と仰せられると、「私は母上のゐられる根之堅洲國（黃泉）に行きたいと思うて泣きます、」と答へられた。父神それを聞いて大に怒り、「お前はもうこの國には置かぬ、」と仰せられて、追ひ拂はれた。伊邪那岐大神は淡海の多賀に居を定められた。

須佐之男命は、「しからば天照大御神に暇乞をして參りませう、」と仰しやつて天に上つて行かれた。その時山川國土は震動した。天照大御神はこの物音を聞いて大に驚かれ、「これはたゞ事ぢやない、きつとわが國を奪ひ取らうと思うて上つて來られるのだらう、」と仰せられて、そこで髮を解いてみづら（男の髮）に結ひ直し、髮にも、鬘にも、右左の手にも八尺勾璁之五百津之美須麻流之珠（美しい勾玉を多く貫き連ねた珠飾）を纏きつけ、背には千入之靫、五百入之靫（箭千本入る靫と五百本入る靫と）をつけ、また伊都之竹鞆（勢よく音のする鞆）は弓を射る時左の手につくる物）を帶び、弓の末を振り立て、股のあたりま

で隱るゝ計大地したゝかに踏みつけ、土を沫雪の如くに蹴散し、勢鋭く、「何用あつていらせられました、」とお尋れなされた。

須佐之男命答へて、「私は決して惡い心はありません、たゞ私が母上の許へ行きたいと泣いた時、父上怒つてもうこの國には置くことならぬと仰せられました故、御暇乞のために參りました。決して別意はありませぬ、」といはれると、天照大御神、「さらばその別意ない證據をお見せなさい、」といはれた。須佐之男命、「その證據には諸共に子を生みませう、」と答へられた。

そこで天安河を中に置いて、天照大御神まづ須佐之男命の佩いてゐられた十拳劒を乞ひ取つて、三段に打ち折り、天之眞名井で振り滌いで、嚙みに嚙んで吹き捨て給ふその息の狹霧から多紀理毘賣命、又の名は奥津島比賣命、次に市寸島比賣命、又の名は狹依比賣命、次に多岐津比賣命がお生れになつた。

次に、須佐之男命、天照大御神の左のみづらにまいてゐられた珠を乞ひ取つて、天之眞名井で振り滌いで、嚙みに嚙んで吹きすて給ふその息の狹霧から正

勝吾勝連日天之忍穗耳命、又右のみづらの珠を嚙んで吹き棄て給ふ息から天之菩卑能命、鬘の珠を嚙んで吹きすて給ふ息から天津日子根命、左の御手の珠を嚙んで吹き捨て給ふ息から活津日子根命、右の御手の珠を嚙んで吹き捨て給ふ息から熊野久須毘命がお生れになつた。

天照大御神は須佐之男命に向つて、「後から生れた五柱の男の子は私の物から生れましたから私の子で、先に生れた三柱の女の子はあなたの物から生れましたからあなたの子であります、」と仰せられた。前の三神は胸形（筑前宗像）君等の祖神で、胸形之宮にゐられる。又後の五柱の神の中、天菩比命の御子建比良鳥命、及び天津日子根命は諸國の國造又は縣主の祖である。

そこで須佐之男命は天照大御神に向つて、「私に惡い心がなかつたから、この通りに子供が出來ました、すると私が勝つた事になります、」と仰しやつて、勝に乘つて天照大御神が作つてゐられる田の畔を壞し、溝を埋め、新穀を召し上る御殿に糞をし散された。天照大御神は怒を忍んで少しも咎めだてをなさらぬ。

それでも須佐之男命のわるさは止まぬ。今度は天照大御神が服屋で衣を織らせてゐられる時に、屋根に穴をあけて、天斑馬を逆剝にして投げ込まれた。天衣織女がこれを見て驚いて、梭で陰部を突いて死んでしまつた。天照大御神は腹にすゑかねて、天石屋戸を閉てゝ閉ぢ籠られた。そこで高天原も葦原中國も悉く暗くなり、永久の暗となつた。萬の惡しき神の聲は五月蠅の噪ぐが如く涌き、色々の妖が起つた。よつて八百萬の神は天安之河原に集り、高御產巢日神の御子思金神の計略で、常世長鳴鳥（鷄）を集めて鳴かせ、天堅石を取り、天金山の鐵を取つて伊斯許理度賣命にいひつけて鏡を作らせ、玉祖命にいひつけて八尺勾璁を作らせ、天兒屋命、布刀玉命を召して天香山の男鹿の肩骨を拔き取り、天香山の天波波迦を取つて占はせ、天香山の榊を根こぎにして、上の枝に八尺勾璁をかけ、中の枝に八尺鏡をかけ、下の枝に白と青との丹寸手（柔かな布）をかけ、布刀玉命は御幣を捧げ、天兒屋命は祝詞を申し、天力男神は戸の脇に隱れて立ち、天宇受賣命は天香山の日蔭葛を襷にかけ、眞柝葛を

鬘とし、天香山の笹の葉を結び束ねて手草（手に持つ物）とし、天之石屋戸に空筒を伏せて、どん〳〵と踏み鳴し、狂人の樣に戯れて、胸乳を出し、裳の紐を陰部に垂れ下げた。そこで高天原も震動する計り八百萬の神は諸共に笑はれた。

天照大御神これを聞いて不思議に思ひ、天石屋戸を細目にお開きなさつて、内から、「私が隱れたために高天原も葦原中國も闇くなつたらうと思ふに、どうして天宇受賣は樂をなし、八百萬の神は笑ふのだらう、」と仰せられた。その時天宇受賣は、「あなたよりももつと尊い神がいらつしやるので、この通りに笑ひ樂んでゐるのであります、」といはれる。その暇に天兒屋命と布刀玉命とは鏡を差し出して天照大御神に見せ奉る時に、愈不思議と思うて少し許り戸の外に出て來られる。隱れてゐた天手力男神はつとその御手を取つて引き出し申す。布刀玉命は尻久米繩（注連繩）をそのお後に引き渡して、「これより内におはいりなさいますな、」と申した。そこで高天原も葦原中國も明るくなつた。

八百萬の神は評議して、須佐之男命に贖罪の品を課せ、鬚を切り、手足の爪を拔いて追ひ拂はれた。（以下少し脫文がある。）また大氣都比賣神に食物を乞はれると、鼻、口、及び肛から種々の甘い物を出してあげられた、須佐之男命はこれを覗いて見て、穢い物を食はせると怒つて大氣都比賣を殺された。その死骸の頭から蠶、目から稻、耳から粟、鼻から小豆、陰部から麥、肛から大豆が出來たので、神產巢日祖命はこれを取らせて種となさつた。

須佐之男命は追はれて出雲の簸河上の鳥上に降られた。川の中に箸の流れるのを見て川上に人のゐるのを知り、川沿ひに上つて行かれると、老夫婦が女子を中に置いて泣いてゐる。「汝等は何者か、」と尋ねられると、「私は大山津見神の子で、名は足名椎、妻は手名椎、女は櫛名田毘賣と申します、」といふ。「何故お前達は泣くのだ、」と尋ねなさると、「私は女八人持つてゐましたが、古志の八岐大蛇が、毎年來て、七人の娘を食ひましたが、またかれがやつて來る時になりましたから泣きます、」といふ。「そいつはどんな形をしてゐるか、」とお尋ねにな

ると、「目は酸漿の如く、身一つに、頭と尾とが八つ宛あります、身に蘿、檜、杉が生え、その長さは八つの谷八つの峯をわたり、腹はいつも血がじく〳〵としてをります、」といふ。命、「ぢやお前の女をおれに吳れぬか、」といはれると、翁、「恐れながらお名前をうかがひたうございます、」といふ。「私は天照大御神の弟ぢや、」と仰せられる。老夫婦は、「では畏りました、さしあげませう、」と申す。乃で命は少女を小さな櫛になしてみづらに刺し、老夫婦に命じて、八鹽折之酒（幾度も絞つて釀した酒）を作らせ、垣を結び、これに八つの門を作り、門毎に八つの棧敷を作り、これに八鹽折之酒を入れた酒船を置いて待つてゐられると、八岐大蛇が果してやつて來て、八つの頭を八つの酒船に入れて酒を飲み、到頭醉つ拂つて寢てしまつた。命は十拳劍を拔いてこれを斬られると、簸河は血になつて流れた。その中の尾を斬り給ふ時、劍の刃が毀けた。不思議に思つて尾を割いて御覽になると鋭い大刀がある。命はこれを取りあげ、珍しい物と思つて天照大御神に献上なさつた。これが草薙の大刀である。

須佐之男命は宮を作るべき所を求めあるいて、須賀に到つて、「茲に來たらすがゝしい氣持になつた、」と仰せられて、茲に宮を作られた。須賀の名はこれより起つた。宮をお作りになる時雲が立ち上つた。そこで次の歌を詠まれた。

八雲立つ、出雲八重垣、夫婦籠に、八重垣造る、その八重垣を。

さて足名椎神を宮司の長となし、稻田宮主須賀之八耳神と名づけられた。櫛名田比賣のお腹に八島士奴美神がお生れになり、また大山津見神の女神大市比賣を娶られ、そのお腹に大年神、宇迦之御魂神がお生れになつた。

八島士奴美神の五代の御孫を大國主神といふ。この神は又の名を大穴牟遲神とも、葦原色許男神とも、八千矛神とも、宇都志國玉神ともいはれる。御兄弟が非常に多かつたが、皆退いて國を大國主神に讓られた。その譯はかうである。御兄弟の神々が稻羽の八上比賣を妻にせうと思つて因幡に行かれる時に、大穴牟遲神に袋を背負はせ、從者として行かれた。氣多の崎に來られると一匹の裸兎が寢てゐる。神々はその兎に、潮を浴びて風に吹かれて寢て居よと敎

へられたので、兎はその通にすると、潮が乾くに從うて皮がたゞれて、痛さにたへずに泣いてゐる。そこに大穴牟遲神が通りかゝつて、「お前は何故にその樣に泣くのだ、」とお尋ねなさると、兎は、「私はもと隱岐島にゐましたが、茲に渡りたいと思ひましたけれども渡り樣がありませんので、海の鰐に向つて、貴樣達の數と俺たちの數と、どちらが多いか競べて見よう。で、貴樣共の仲間悉く出て來て、こゝから氣多の崎まで並んでゐれ、おれが數へて見ようと巧く欺して、その並んでる上を飛び渡つて茲に來ましたが、陸に上らうとする時、巧く欺されやがつた、鰐の馬鹿野郎といひますと、最も端にゐた鰐が怒つて私の衣を剝いで了ひました、そこで泣いてゐますと、あなたの御兄弟がいらつしやいまして、潮に漬つて風に吹かれて寢てゐたがよいと仰しやいましたので、その通りにしますと、この樣になつてしまひました、」といふ。そこで大穴牟遲神は、「早く川口に行つて水で身を洗つて、蒲の花を敷き散してその上に寢轉んだがよい、」と敎へられた。兎はその通りにすると、本のやうになほつてしまつた。

これが因幡の白兎である。その兎が大穴牟遲神にいふやう、「八上比賣はきつとあなたのものとなります、」といつた。

八上比賣は神々の意に從はず、却つて大穴牟遲神の妻にならうといはれた。そこで兄弟の神々は大穴牟遲神を殺さうと相談して、大穴牟遲神に、「伯耆の手間の山に赤い猪がゐる。それを俺共が追ひ下すから、お前は下に待ちうけて手取りにしろ、」といひつけ、猪に似た大石を燒いて轉した。大穴牟遲神はこれを取らうとして、燒け死なれた。御母刺國若比賣悲み嘆いて、天に上つて神產巢日命に愬へられ、その御力で漸く蘇生へらすことが出來た。神々この度は大きな樹を伐つて、二つに割いて矢をはめ、大穴牟遲神をその中に入れ、矢をぬいて絞め殺した。それを母の神が尋ね出してまた助けて、今に本當に殺されてしまふからといつて、紀國の大屋毘古神の所に逃げさせた、神々また追ひかけて來て射殺さうとされるのを、危くも遁げ去る。

大穴牟遲神は母の敎によつて、須佐之男命のゐられる根堅洲國に行かれた。

須佐之男神の女須勢理毘賣は大穴牟遲神を戀うて夫婦となられた。さてこの事を父に告げられると、父の大神は大穴牟遲神を呼び入れて蛇室の中に入れられた。しかし大穴牟遲神は須勢理毘賣命から授けられた蛇比禮を振つて蛇の難を逃れる事が出來た。次の夜は吳公と蜂との室に入れられたが、前と同じ樣に吳公蜂比禮で又何事もなかつた。大神この度は鳴鏑を大地の中に射入れて大穴牟遲神に持つて來いと命じ、野に入られるのを見すまして周圍から火をかけられた。すると一疋の鼠が來て、玆に洞穴があると敎へた。大穴牟遲神そこを踏まれると、地が陷つて御身が隱れる、その間に火は燒けて通つたので危く一命を助りたまふ。さて鼠はかの鳴鏑を咋へて來て大穴牟遲神に奉つた。

須勢理毘賣は葬式の道具を用意して泣きながら來られ、大神もまたもう死んでゐるだらうと思うて野に出て見られると、大穴牟遲神は思ひの外に無事で、かの鏑矢をさし出された。大神は家に連れかへつて、大廣間で自分の頭の虱を取ることを命ぜられた。大穴牟遲神その頭を見られると、吳公が澤山たかつて

ゐる。大穴牟遲神はまたも妻の敎に從うて櫻の實を嚙み破り、赤土を含んで吐き出されると、大神は吳公を咋ひ殺して吐き出してゐると思ひ、稍氣を許して眠り込んでしまはれた。そこで大穴牟遲神は大神の髮を椽に結ひつけ、大きな石を室の戸に立てかけ、大神の生太刀、生弓矢、及び天沼琴を盜み取り、須勢理毘賣を負うて遁げ出し給ふ。遁げ出される時天沼琴が木の枝に觸れて鳴る。大神はこの物音に眼を醒し、起きあがつて家を引き倒し給ふ。しかし椽に結びつけた髮を結いてゐられる間に、大穴牟遲神は遠く遁げのびられた。

大神は黃泉平坂まで追ひかけて來て、遠くから大穴牟遲神を呼びかけて、「その生太刀、生弓矢でお前の兄弟共を追ひ拂うて、自ら大國主神となり、また宇都志國玉神（共に天下に主たる神の意）と爲り、須勢理毘賣を正妻として宇賀の山の麓に大宮を作つて住へ、」といはれた。

そこで大國主神はその太刀と弓矢とを以て兄弟の神々を追ひ拂ひ、國を經營りはじめ給ふ。八上毘賣も大國主神の妻となられた。

大國主神、越の國の沼河毘賣を娶らうとその家に行き、次の歌を詠まれた。

八千矛の、神の命は、八島國、妻求ぎ兼ねて、遠々し、越の國に、賢女を、ありと聞かして、麗女を、ありと聞こして、結婚に、在り立たし、結婚に、在り通はせ、太刀緒をも、未だ解かずて、襲をも、未だ解かれば、少女の、鳴すや板戸を、押らひ、わが立たせれば、引らひ、我が立たせれば、青山に鵺は鳴き、野鳥、雉子は響む、庭鳥、鶏は鳴く、慨くも、鳴くなる鳥か、この鳥も、打ち惱めこせれ、急飛ふや、天馳使、事の語り言も、是なば。

沼河日賣、まだ戸を開けずに、内から次の如く歌はれた。

八千矛の、神の命、軟草の、女にしあれば、わが心、浦渚の鳥ぞ、今こそは、千鳥にあらめ、後は和鳥にあらむを、命は、な死せ給ひそ、急飛ぶや、天馳使、事の語り言も、是なば。

青山に、日が隱らば、烏羽玉の、夜は出でなむ、朝日の、笑み榮え來て、

栲綱の、白き腕、沫雪の、軟撓る胸を、そ敲き、敲き拱り、眞玉手、玉手差し纏き、股長に、寢はなさむを、あやに、な戀ひ聞こし、八千矛の、神の命、事の語り言も、是なば。

その夜は逢はず、次の夜にお逢ひになつた。大國主命、出雲から大和に上らうとして、出立される時、片手を鞍にかけ、片足を鐙に踏みかけながらよまれた歌。

須勢理毘賣は、嫉妬深い方であつた。

烏羽玉の、黑き御衣を、眞具に、取り裝ひ、奥つ鳥、胸見る時、鰭揚も、これは宜はず、邊つ波、磯に脫き棄て、鴟鳥の、青き御衣を、眞具に、取り裝ひ、奥つ鳥、胸見る時、鰭揚も、こも宜はず、邊つ波、磯に脫き棄て、山縣に、求ぎし茜春、染木が汁に、染衣を、眞具に、取り裝ひ、奥つ鳥、胸見る時、鰭揚も、此し宜し、愛子やの、妹の命、群鳥の、我が群れ往なば、引鳥の、吾が引け往なば、泣かじとは、汝はいふとも、大和の、一本薄、項傾し、汝泣かさまく、朝雨の、狹霧に立たむぞ、若草の、妻の命、事の語

り言も、是なば。

須勢理毘賣、酒杯を取つて、大國主神に捧げながらよまれた歌。

八千矛の、神の命や、わが大國主こそは、男に坐せば、打ち見る、島の崎々、かき見る、磯の崎落ちず、若草の、妻持たせれめ、吾はもよ、女にしあれば、汝をおきて、男はなし、汝をきて、夫はなし、綾垣の、ふはやが下に、虫衾、柔やが下に、沐雪の、軟撓る胸を、栲綱の、白き腕、を敲き、敲き拱り、眞玉手、玉手さし纏き、股長に、寢をしなせ、豐御酒、獻ゞせ。

かくて互に盃を取り換して、心變らぬ契をなされた。これを神語といふ。

大國主神の御子は、多紀理比賣命の腹に阿遲鉏高日子根神、高比賣命、又の名下光比賣命、次に神屋楯比賣命の腹に事代主神、次に鳥耳神の腹に鳥鳴海神がゐられる。この神の御子に國忍富神、その御子に速甕之多氣佐波夜遲奴美神、その御子に甕主日子神、その御子に多比理岐志麻流美神、その御子に美呂浪神、その御子に布忍富鳥鳴海神、その御子に天日腹大科度美神、その御子に遠津山

岬多良斯神がゐらせられる。

大國主神が出雲の美保の崎に行かれた時に、天之羅摩船に乘り、鵝の皮を着た人が波の間から現れて來た。久延毘古を呼んでその名を尋ねられると、「神產巢日神の御子少名毘古那神であらせられます、」と答ふ。大國主神この由を神產巢日神に申されると、大神、「誠におれの子だ、これから二人兄弟となつて、この國を治めよ、」といはれた。この神後に常世國に去られた。久延毘古は今の山田之曾富騰である。少しも歩けないが、天下の事を悉く知つてゐた。

少名毘古那神が去られて後、大國主神は相談相手を失うて愁へてゐられると、海を光らして來る神がある。その神、「われをいつき祭れ、國を治めることに力をそへてやらう、」といはれた。その神は三諸の山の御神である。

大年神の御子には、大國御魂神、韓神、曾富理神、向日神、聖神、大香山戸臣神、御年神、奥津日子神、奥津比賣神、大山咋神、庭津日神、阿須波神、波比岐神、香山戸臣神、羽山戸神、庭高津日神、大土神があらせられる。

羽山戸神には若山咋神、若年神、若沙那賣神、彌豆麻岐神、夏高津日神、秋毘賣神、久久年神、久久紀若室葛根神がゐられる。

天照大御神は「豐葦原之千秋之長五百秋之水穗國は吾が子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の治めるべき國である、」と仰せられて、之を天降された。天忍穗耳命は天浮橋に立ちて御覽になると、水穗國には邪神があばれ廻つて大變騷いでゐる。そこで還つてそのよしを大御神に申上げられた。高御產巢日神、天照大御神の二神は、八百萬の神を天安河の河原に集めて、誰を遣してわが心を傳へたらよからうと評議なさつた末に、天菩比神を遣される事になつた。處が天菩比神は大國主神に媚びついて、三年經つまで歸つて來ぬ、そこで再び會議を開いて、思金神の意見に從つて、天津國玉神の子天若日子に天之麻迦古弓、天之波波矢を賜うて遣された。しかるに天若日子も、大國主神の女下照比賣を妻とし、且その國をわが物にしようと思つて、八年の間歸つて來ぬ。そこで高天原では三度評議をして、雉の名鳴女を天若日子の許に遣して、早く復命を申す

す樣に催促させられた。名鳴女は天から降りて、天若日子の門にある湯津楓の上に止つて、精しく仰せ言を傳へた。若日子天之波士弓に天之波波矢を番へてこれを射殺す。その矢雉の胸を貫いて逆に射上げられ、天之安河原にゐらせられる天照大御神、高御產巢日神の御許に屆いた。高御產巢日神その矢を取つて御覽になると若日子に賜つた矢で、しかも羽に血がついてゐる。そこで、「この矢あらぶる神を射た矢ならば天若日子にあたるな、若しかれに惡しき心があるなら若日子この矢で死れ」。と仰せられて、もとの穴から投げかへされた。所がその矢、天若日子の寢てゐる胸にあたつて、かれは死んでしまつた。雉は遂に歸つて來なかつた。返事のないことを雉の頓使といふ語の起はこれである。

天若日子の妻下照比賣の泣き悲まれた聲が、風に吹かれて天上に聞えた。天にある天若日子の父と妻子とはこれを聞いて泣き悲しみ、地に降つて來て、喪屋を作つて、八晝夜の間死人を呼び生す歌舞を行ふ。そこに下照比賣の兄の阿遲志貴高日子根神が弔ひに來られ所が、その容貌が天若日子によく似て居たの

で、父と妻とは我が子我が夫の生き還つたと思ひたがへて、泣きながらその手足に取りつく。阿遲志貴高日子根神は「おれは親しい友の死んだのを弔ひに來たのに穢しい死人に比べるとは怪しからん、」と怒つて、十拳劍を拔いて喪屋を切り伏せ、足で蹴飛された。これが美濃の藍見河の河上にある喪山である。

兄神が怒つて飛び去り給ふ時、下照比賣命、その名を顯す爲に歌はれた歌。

天なるや、弟棚機の、項懸せる、玉の御統、御統に、明玉光映、眞谷、二亙らす、阿遲志貴、高比古根神ぞや。

天照大御神はまたも八百萬の神を集めて、この度は誰を遣さうと評議されたが、天安河の河上の石屋にある伊都之尾羽張神か、さもなくばその子建御雷神がよいといふことに極つて、天迦久神を遣してこの由を伊都之尾羽張神に傳へてその意向を問はれると、伊都之尾羽張神は「畏りました、では子の建御雷神をさしあげませう、」と答へた。そこで天鳥船神をこれに副へて遣された。

二柱の神は出雲の伊那佐之小濱につき、十拳劍を波の穗に逆に刺し立て、そ

の劍の前に趺坐をかいて、大國主神に向ひ、「おれは天照大御神、高御產巢日神の御命令で來た。お前の治めてゐる葦原中國は、わが子の治めるべき國だと天照大御神は仰せられた。お前はその御言葉に從ふ氣か、」と尋ねられた。大國主神答へて、「私は何ともお答へ申しかねます、我が子八重言代主神がお答へ致す筈でありますが、美保の崎に遊獵に出かけてまだ歸つて參りませぬ、」といはれた。そこで天鳥船神を遣してこれを召し寄せて聞かれると、言代主神は父に向つて、「畏多い、この國は天つ神の御子におさし上げなさいませ、」といつて逆手を打つて咒をし、その船を青柴垣に變じて、その中に隱れられた。

建御雷神は更に大國主神に向つて、「今、言代主神はあの樣にいつた、外になほ異存をいふ子があるか、」と尋ねられると、「今一人建御名方神があります、この外には異存を申す樣な者はありませぬといはれた。折しもその建御名方神は大きな石を手の先に指しあげて、「誰だ、おれの國に來てこそ〳〵と物を言つてるのは、さあ力競べをしよう、」と云ひながら建御雷神の手を取られると、そ

の手が氷の柱と變り、更に劍の刃と變つたので、建御名方神は懼れて退いた。こたびは建御雷神建御名方神の手を取つて、若葦を取るが如くに攫みひしいで投げつけられると、叶はぬと逃げ去る。それを追ひかけて信濃の諏訪湖の畔で追ひついて、殺さうとされた時、「もう決して御言葉に叛きませぬ、この葦原中國は天つ神の御子にさしあげます。どうか命をお助け下さいませ」、と申された。

建御雷神はまた出雲に還つて來て、大國主神に向つて、「お前の子は二人とも天つ神の御子の仰に背かぬというたが、お前の考はどうぢや、」といはれると、大國主神答へて、「私も二人の子の申した通りに、仰に叛きませぬ、この葦原中國は差上げませう。唯一つ御願があります。それは、私の住家を、天つ神の御子の御住居と同じやうに、地の底の岩に大きな柱を立て、空高く氷木を聳かして作つて下さるならば、私は隱退致しまして、多くの子供等は言代主神が率ゐて天つ神の御子にお仕へ致しませう、」といつて去られた。そこでその乞に從う

て出雲の多藝志の小濱に天之御舍を作つて與へ、水戸神の孫、櫛八玉神を膳夫としてつけた。これが今の出雲の大社である。

建御雷神は高天原に歸つて、葦原中國を平定したことを申上げられると、天照大御神、高御產巢日神の二神は、日嗣の御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命を召して、「葦原中國は平定したといふから、以前いひつけた通りに、お前降つて行つて治めよ」、と命ぜられた。天忍穗耳命答へて、「私が天降る用意をしてをります間に子供が生れました、名は天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命、これを私の代りに遣しませう、」といはれた。この御子は高御產巢日神の御女、萬幡豐秋津師比賣命の御腹に生れなさつたので、なほこの外は御兄天火明神がいらせられる。そこで天照大御神、高御產巢日神の二神は邇邇藝命に向つて、「この豐葦原水穗國はお前が治めるべき國だ、」と仰せ渡された。邇邇藝命は「畏りました」と答へられる。そこで邇邇藝命が天降らうとされる時に、天之八衢にゐて、上は高天原、下は葦原中國に光り渡つてゐる神がある。そこで二神

は天宇受賣神に命じて、「お前は女だが、氣が強いから、何者であるか聞いて來い、」といはれたので、天宇受賣神行いて尋ねると、「私は國つ神の猨田毘古神であります。天つ神の御子が天降られるといふ事を聞きまして御先伴を致しませうと思ひましてまゐりました、」と申した。

邇邇藝命の御供には、天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊斯許理度賣命、玉祖命、以上五人の部屬の頭が從うた。

なほ天照大御神は、八尺勾璁、鏡、草那藝劍、及び常世思金神、手力男神、天石門別神をさし副へて、「この鏡は我が魂と思ひ、我を拜するが如くいつき祭れ。」と仰せられた。

そこで邇邇藝命は天上の御座所を離れ、天之八重雲を押し分け〳〵、天浮橋を渡つて、筑紫の日向の高千穗の久士布流多氣に降り給うた。天忍日命、天津久米命の二人は天之石靫を負ひ、頭椎之大刀を佩き、天之波士弓を持ち、天之眞鹿兒矢を手挾んで御前に立つて御伴した。

邇邇藝命は住むべき地を求めて、笠狹の崎に來られて、「ここは朝日の照す國、夕日の輝く國である、住むに最もよい土地だ、」と仰せられて、地の底の石に大きな宮柱を立て、空高く氷木を聳やかして、宮を作つてお住みになつた。

邇邇藝命は天宇受賣命に命じて、猨田毘古神をば、その本國の伊勢に送り還させ給うた。天宇受賣命は伊勢國について、海中の大小の魚類共を悉く呼び集めて、「汝等は天つ神の御子に仕へ奉るか」、と尋ねられると、魚類共は皆「お仕へ申します、」と答へた、その中にただ一つ海鼠のみは何とも御返事をしない、そこで天宇受賣命は、「返事をせぬのはこの口か、」といひながら、小刀を以てその口を裂かれた。そこで今でも海鼠の口が裂けてゐる。

邇邇藝命は笠狹の崎で一人の美しい乙女にお逢ひになつた。「お前は誰の子だ、」とお尋ねになると、「大山津見神の女、名は神阿多都比賣、又の名は木之花之佐久夜毘賣と申す者でございます、」と答へられた。更に、「兄弟があるか」とお尋ねになると、「石長比賣と申す姉がございます、」と答へられた。そこで、「私

はお前を妻にしたいと思ふがどうぢや、」と仰せられると、「私は何とも御返事申上げかねます、父に仰つて下さいませ。」と答へられる。そこで大山津見神に申込み給ふと、非常に喜んで姉の石長比賣をもそへて奉られた。然るに姉姫は殊の外の醜婦であつたので、その儘に送り返し、妹姫のみを止めて一夜添ひ臥し給うた。大山津見神は姉姫を送り返されて非常に耻ぢ、申されるやう、「私が二人の娘をさし上げましたのは譯があります、石長毘賣をさしあげましたのは、雨が降つても風が吹いても石の樣にいつまでもお變りなき樣、また木花之佐久夜毘賣をさしあげましたのは、木の花の榮ゆるやうにお榮えなされる樣にと思うたのでありますのに、今石長毘賣を返して、木花之佐久夜毘賣ばかりをお止めなさいましたから、木の花の散るが如くに脆くおありでございませう、」と申された。今に至る汔代々の天皇の御命の短いのはこの爲である。

後、木花之佐久夜毘賣は邇邇藝命の許にまゐつて、たゞならぬ身となつて、今臨月に當つてゐるといふことを申されたので、邇邇藝命、「たつた一夜で妊る

筈はない、これは我が子でなくて國つ神の子であらう、」といはれると、姫、「我が腹の子がもし國つ神の子ならば無事には生れますまい、若し天つ神の御子ならば無事に御生れなさいませう、」と申されて、八尋殿を作つてその中に入り、土を以て塗り塞ぎ、その殿に火をつけて產まれた。その火の盛に燃ゆる時にお生れになつたのが火照命、次に火須勢理命、次に火遠理命、またの名は天津日高日子穗穗手見命である。火照命は隼人の阿多君の祖である。

火照命は漁夫となつて大小の魚を取り、火遠理命は獵師となつて諸の鳥や獸を取られた。然るに火遠理命は海山の獵の道具をば暫の間取りかへたいと三度も願はれたが、兄君は許されなかつた。しかし弟君はなほも願はれたので、やつと承諾をなさつた。所が火遠理命は海の獵の道具で魚を釣られたが、一尾の魚も釣ることが出來ず、剩へ鉤を海の中に失はれた。所へ兄の火照命は再び獵の道具をもとの樣に取りかへようといはれた。その時弟君「あなたの鉤は海の中に落して終ひました」と散々いつてわびられたけれども、兄君はそれでも聞き

入れず、なほ返せ〳〵とせめられた。弟君は止むを得ず佩びてゐられた十拳劍で五百本の鉤を作つて償はれたが受取られない、更に千本の鉤を作つて償はれてもなほ受取らずにもとの鉤を返せといはれた。そこで弟君は海邊で泣いてゐられると、鹽椎神が來て、「何故泣いていらつしやいますか、」と尋ねた。弟君、實はかやう〳〵とあつた次第を話されると、鹽椎神、「それなら御心配なさいますな、」といつて、無間勝間之小船を造つてその船に載せ奉り、「私がこの船を推し流しますから、その時ぢつと待つておいでなさいませ、するとよい路があります、その道をいらつしやると鱗見たやうに造つた家があります、それが綿津見神の御殿でございます、その門の所に井戸があつて、その井戸の傍に湯津香木がありますから、それにのぼつていらつしやると、海神の女が來て、あなたの困つていらつしやる事に就いて御相談相手となります、」といつて敎へた。火遠理命は敎へられた通りになさると全く彼がいつた通りであつた。そこで香木の枝に上つてゐられると、海神の女豐玉毘賣の侍女が玉の水入を持つて水を酌

まうとすると井戸の中に人影が映つてゐる。仰いで見ると美しい男がゐた。火遠理命はこれを見て水を吳れといはれると、女は玉の水入に入れてさし上げた。命は水を飲まずに、頸の璵を解いて口に含んでその中に吐き入れられた。女はこれを姫の許に持つて行つて　かやう〳〵とあつた次第を語ると、姫は不思議に思うて出て見ると、果して美しい男がゐて、自分の方を見てゐられた。そこで姫はこの由を父に申されると、海神は自ら出でて、「この人は天津日高の御子でいらせられる、」といひながら敬しく迎へ入れて、海驢の皮の敷物を敷き、その上に絁疊を敷いて坐せ奉り、色々の御馳走をして、女豐玉毘賣を婚せ奉つた。火遠理命はかくして三年の間こゝにお住ひになつた。

火遠理命は初のことを思ひ出して、大きな嘆息を一つ吐かれた。これは三年の間に一度もない事であつたので、豐玉毘賣は不思議に思つてこの由を父に訴へられると、父君はその譯を尋ねられた。命よつてこゝに來た譯を話された。海神よつて大小の魚共を集めてしらべられると、鯛の喉からその鉤が出て來

た。海神これを命に奉つて、「これを兄君にお返しなさる時、この鉤は淤煩鉤、須須鉤、貧鉤、宇流鉤（いやな、まづい鉤の意。）といつて、後むきになつてお渡しなさいませ。そして兄君が上田をお作りなさる時はあなたは下田、下田をお作りなさる時は上田をお作りなさいませ。私は水を掌つてをりますから、三年の内に兄君は必ず貧しくなられませう、兄君がもしもこれを怨んで攻めておいでなさいますならば、鹽盈珠で溺らし、もし救を求められたらば鹽乾珠で助けて、かやうにしていぢめておやりなさいませ、」といつて二つの珠を渡した。

さて和邇に命を送らせ奉る。和邇は命を頸に乘せて一日の中に送り届け申した。その和邇が歸らうとする時、命は紐小刀を解いてその頸につけてお返しなされた。

さて火遠理命は歸りついて、海神の敎へた通りにして兄君を苦しめられると、兄君は遂に降參して、「これから、あなたの書夜の番人となつて仕へませう、」といはれた。

海神の女豐玉毘賣は自ら來て、「私は早くから妊つてゐましたが、今その御子が生れる時になりました。しかし天つ神の御子を海原で生む譯にはまゐりませんから參りましたのでございます。」といはれた。そこで海の渚に鵜の羽を葺草として產屋を造られた。その產屋を未だ全く葺きをへぬ内に、腹が痛み出して產屋に入られたが、その時夫の君に向つて申されるやう、「すべて他の國のものは本來の形になつて子を生むものでありますが、私も今もとの姿となつて產を致しますから、決してお覗き下さいますな、」といはれた。火遠理命これを聞いて不思議に思うて、そつと覗いて見られると、姫は八尋の和邇と形を變じて腹這ひ廻つてゐられた。豐玉毘賣命は覗かれたのを知つて恥しさにたへず、「私はこの子を生んでから、始終海路を通つて逢ひに參りませうと思うてゐましたけれど、あなたが私のもとの姿を御覽になりましたから、お恥しくて再びお目にかゝることは出來ませぬ。」といつて、この國と海との境を塞いで歸り去られた。故にその御子を天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命と申す。

然し豐玉毘賣は覗かれたことを怨みながらも、なほ夫戀しさの念に堪へず、妹の玉依比賣に托して次の歌を獻りたまふ。

赤玉は、緒さへ光れど、白玉の、君が裝し、貴くありけり。

夫の君の答へたまうた歌。

沖つ鳥、鴨着く島に、わが寢ねし、妹は忘れじ、世の盡に。

日子穗穗手見命は高千穗宮に五百八十年の間いらせられた。御陵は高千穗の山の西にある。

天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命は姨玉依毘賣を娶り、その御腹に五瀨命、稻氷命、御毛沼命、若御毛沼命、又の名は神倭伊波禮毘古命の四柱がいらせられる。御毛沼命は波を踏んで常世國に渡り、稻氷命は妣の國海原に行かれた。

神武天皇　神倭伊波禮毘古命は御兄の五瀨命と二人高千穗宮にゐられたが、「共に御相談をなされて、天の下を安らかに治めるには此所は都合がわるいから、東の方に行かうと、日向國を立つて筑紫に行かれた。さて豐國の宇佐に到

り、それから遷つて筑紫の岡田宮に一年、更に遷つて安藝國の多祁理宮に七年、なほ上つて吉備の高島宮に八年いらせられた。

こゝを立つてなほ上つて行かれると、速吸門で、龜の甲に乘つて釣をしてゐる者がある。その名を尋ね給ふと宇豆毘古といふ者と名乘る。海路の案内を知つてゐるといふので、御伴に加つて御道しるべの役を勤める事となつた。

さて攝津の難波のあたりを經て、河内の白肩津に御舟を着けられた。この時登美能那賀須泥毘古、軍を起して戰をしかけ奉る。よつて楯を取つて船より下り給ふ。そこでこの地を楯津といつた。今の蓼津である。この時の戰に五瀨命は手に矢傷を負はれた。「これは、日神の御子でありながら、日に向つて戰うた故にこんなことになつたのぢや、これから日を後にして敵を討たう、」と仰せられて、南の方に廻りたまふ時、茅渟海で御手の血を洗はれた。そこで血沼海といふ名は起つたのである。かくて紀國の男港に到られた時に、五瀨命はその矢傷のために遂に御かくれになつた。御墓は紀國の竈山にある。

神倭伊波禮毘古命そこから廻つて熊野村にいらせられた時に、大きな熊がかすかに見えて、すぐに見えなくなつた。その時命は俄に御病氣にかゝらせられ、率ゐ給ふ軍隊も亦悉く煩うた。この時熊野の高倉下といふもの一本の刀を持つて來て命にさしあげると、命の御病氣は不思議にも忽ちに癒え、兵士等の病氣も亦悉くなほつた。熊野の山の邪神共がおのづから皆斬り仆されたのである。命、高倉下に向つて、お前はどうしてこの太刀を手に入れたのかとお尋れになると、かれ答へて申すやう、「私は不思議な夢を見ました。それは天照大御神、高御產巢日神の二神が建御雷神をお呼びになつて、葦原中國は非常に騷いでをる。天つ神の御子が惡神の毒氣にあてられてゐられると思はれる。汝行つて助け奉れと仰せられますと、建御雷神、「私はまゐりませんでも、茲に中國を平定した太刀がありますから、之を私の代りに降しませう」、といつて、私の家の家根の頂を穿つて、そこから太刀を投げ入れ、私に向つて、「汝この太刀を天つ神の御子に奉れ、」と申されたと夢みて、さて目がさめますと、この太刀が

ありました。それで今あなたにさしあげたのであります。」と申し上げた。

さて高御產巢日神は天から八咫烏を遣して命の嚮導を勤めさせた。命はその後についてお出でになると、吉野川の川下に着き、それから吉野の山に入り給ふ。途すがら、贄持之子、井氷鹿、石押分之子などが御軍につき從ふ。命はそれから宇陀にお出でになつた。

宇陀に兄宇迦斯、弟宇迦斯といふ二人の酋長がゐる。まづ八咫烏を遣して、「汝等我に從ふか、」と尋ねさせられた。兄宇迦斯は鳴鏑を以てその使を射返した。その箭の落ちた所を今訶夫羅前といふ。さて兄宇迦斯は軍兵が思ふやうに集らなかつたので、僞り降つて、大きな御殿を作つて、その内に仕掛をして命を壓し殺し奉らうとした。しかるに弟宇迦斯はまづ命の許に參つてこの事を逐一密告した。そこで道臣命、大久米命の二人は兄宇迦斯を呼んで罵つて、「うゐが天つ神の御子に仕かけ奉らうとすることをみづからうけて見よ、」といひさま劍の柄に手をかけ、矛をしごいて、かれを殿の内に追ひ入れると、兄宇

迦斯は自ら作つた壓に打たれて死んだ。二人はそれを引き出して散々に斬る。よつてこの地を宇陀之血原といふ。

さて弟宇迦斯の奉つた御馳走を悉く軍兵共に下された。その時の御歌、

宇陀の高城に、鳴罠張る、我が待つや、鳴は障らず、勇細し、鯨障る、前妻が、魚乞はさば、立柧棱の實の、無けくを、こきしひゐれ。」後妻が、魚乞はさば、柃實の、多けくを、こきだひゐれ。」えゝしやこしや、あゝしやこしや。

それから忍坂の大室に行かれた時に、尾のある土雲あまた、御軍を迎へ討たうと待ち構へてゐる。命は彼等に御馳走を賜ひ、その人數だけの料理人を設けて、皆に刀を帶びさせ、歌を聞いた時に一度に斬れと敎へられた。その歌、

忍坂の、大室屋に、人多に、來入り居り、人多に、入り居りとも、みつみつし、久米の子が、頭椎、石椎持ち、擊ちてし止まむ。」みつ〳〵し、久米の子らが、頭椎、石椎持ち、今擊たば善らし。

かく歌つて、刀を拔いて一度に打ち殺した。

後、登美毘古を討たうとして詠みたまうた歌三首、

みつ〳〵し、久米の子等が、粟生には、韮一莖、其根が莖、其根芽繋ぎて、打ちてし止まむ。

みつ〳〵し、久米の子らが、垣下に、植ゑし薑、口嚐く、われは忘れじ、打ちてしやまむ。

神風の、伊勢の海の、大石に、延纒ふ、細螺の、延纒り、擊ちてし止まむ。

又、兄師木、弟師木を擊ち給うた時、軍兵共暫は疲れた。その時の御歌、

楯並めて、いなさの山の、木の間從、い往き覗らひ、戰へば、吾早や飢ぬ、島つ鳥、鵜飼が徒、今助けに來れ。

この時邇藝速日命が天から降つて來て、神倭伊波禮毘古命に仕へられた。

さて、命はかくの如くして天下を平定して、畝傍の橿原宮にいらせられて天下を治めたまうた。命日向にいらせられた時に、阿比良比賣を娶つて多藝志美

美命、岐須美美命の二柱がいらせられるが、更に、大后となる美人を求められた時、大久米命が申すやう、「こゝにの御子だといふ少女があります。その譯は、茲に勢夜陀多良比賣といふ美人がゐましたのを、三輪の大物主神が戀して、丹塗矢と化つて厠の下からその陰部を突かれました、姫は驚いてその矢を持つて來られると、その矢が美しい男となつて、姫と夫婦になり、その間にお生れになつたので、名を富登多々良伊須々岐比賣命、またの名を比賣多々良伊須氣余理比賣と申します、」と申上げた。

この姫他の六人の少女と共に高佐士野に遊びに出かけたのを、大久米命が見て、次の歌を天皇に申上げた。

倭の、高佐士野を、七人行く、乙女ども、誰をし覓かむ。

天皇は伊須氣余理比賣が眞先にゐることを知つて、次の歌を答へ給うた。

かつ〳〵も、いや先立てる、愛をし覓かむ。

さて大久米命、天皇の仰を姫に傳へると、姫は大久米命の鋭い目着を見て、

胡鸞鶴鴿、千鳥眞鳴、など裂ける利目。

と歌はれると。大久米命は次の如くにお答へした。

少女に、直に逢はむと、吾が裂ける利目。

かくて姫は天皇に仕へ奉らうと申された。その家は狹井川の川上にあつたが、天皇はそこに一夜お泊りなされた。後、姫大内に參られた時、天皇の御歌。

葦原の、醜き小屋に、菅疊、彌清敷きて、わが二人寢し。

この御腹に日子八井命、神八井命、神沼河耳命の三柱のお子がお生れになつた。

天皇崩御の後、當藝志美美命は大后伊須氣余理姫を娶らうとし、且三人の弟たちを殺さうと謀られたので、伊須氣余理比賣は歌を以て三人の御子達にこのことを告げられた。その歌、

狹井川從、雲立ち渡り、畝火山、木の葉さやぎぬ、風吹かむとす。

畝火山、晝は雲と居、夕されば、風吹かむとぞ、木の葉さやげる。

御子たちは驚いて當藝志美美命を殺された。初めお兄神八井耳命は手足戰い

て殺すことを得ず、弟の神沼河耳命が代つて殺されたので、兄君は天位を弟の神沼河耳命に讓つて自らその下に仕へられた。

神倭伊波禮日古天皇は御年百三十七歳、御陵は畝傍山の北白檮尾の上にある。

綏靖天皇　神沼河耳命は葛城の高岡宮にゐ給うて、天下を治め給うた。河俣毘賣の御腹に師木津日子玉手見命がいらせられる。御年四十五歳。御陵は衝田岡にある。

安寧天皇　師木津日子玉手見命は堅磐の浮穴宮にゐて天下を治め給うた。后阿久斗毘賣との間に常根津日子伊呂泥命、大倭日子鉏友命、師木津日子命が生れ給うた。御年四十九歳。御陵は畝傍山の美富登にある。

懿德天皇　大倭日子鉏友命は輕の境岡宮にいらせられて天下を治め給うた。后賦登麻和訶比賣命との間に御眞津日子訶惠志泥命、當藝志比古命が生れ給うた。御年四十五歳。御陵は畝傍山の纖砂谿の上にある。

孝昭天皇　御眞津日子訶惠志泥命は葛城の掖上宮にゐて天下を治め給うた。后余曾多本毘賣との間に天押帶日子命、大倭帶日子國押人命の二人の御子があらせられる。御年九十三歳、御陵は掖上の博多山の上にある。

孝安天皇　大倭日子國押人命は葛城の室の秋津島宮にいらせられて、天下を治め給うた。后忍鹿比賣命との間に、大吉備諸進命、大倭根子日子賦斗邇命が生れ給うた。御年百二十三歳。御陵は玉手岡の上にある。

孝靈天皇　大倭根子日子賦斗邇命は黑田の盧戸宮にゐて天下を治め給うた。細比賣命の御腹に大倭日子國玖琉命、次に春日之千千速眞若比賣の御腹に千々速比賣命、次に意富夜麻登玖邇阿禮比賣命の御腹に夜麻登登母母曾毘賣命、日子刺肩別命、比古伊佐勢理毘古命、またの名大吉備津日子命、倭飛羽矢若屋比賣、次に蠅伊呂杼の御腹に日子寢間命、若日子建吉備津日子命、合せて八柱の御子があらせられる。御年百六歳。御陵は片岡の馬坂の上にある。

孝元天皇　大倭根子日子國玖琉命は輕の境原宮にゐて天下を治め給うた。后

内色許賣命との間に大毘古命、少名日子建猪心命、若倭根子日子大毘毘命、次に伊賀迦色許賣命の御腹に比古布都押之信命、次に波邇夜須毘賣の御腹に建波邇夜須毘古命、あはせて五柱の御子がいらせられる。御年五十七歳。御陵は劍池の中岡の上にある。

開化天皇　若倭根子日子大毘毘命は春日の率川宮にいらせられて天下を治め給うた。竹野比賣の御腹に比古由牟須美命、鹿母伊賀迦色許賣命の御腹に御眞木入日子印恵命、御眞津比賣命、意祁都比賣命の御腹に日子坐王、鷦比賣の御腹に建豐波豆羅和氣王、合せて五柱の御子があらせられる。御年六十三歳。御陵は率川の坂の上にある。

崇神天皇　御眞木入日子印恵命は磯城の水垣宮にゐて天下を治め給うた。遠津年魚目目微比賣の御腹に豐木入日子命、豐鉏入日賣命、次に意富阿麻比賣の御腹に大入杵命、八阪之入日子命、沼名木之入日賣命、十市之入日賣命、次に御眞津比賣の御腹に伊久米入日子伊沙知命、伊邪能眞若命、國片比賣命、千千

都久和比賣命、伊賀比賣命、倭日子命、合せて七皇子五皇女がいらせられる。

この天皇の時疫病が流行して民が死に盡さうとした。天皇愁へて神の御告を乞ひ給ふと、大物主大神御夢にあらはれて、これは我が仕業であるから、我を祭りたまふならば祟がなくなつて國が安らかになりますと告げられた。そこで大物主神と活玉依毘賣との間に出來た御子櫛御方命の曾孫の意富多多泥古命を神主として三諸山に社を立てゝ祭り給うた。これが意富美和之大神である。又伊迦賀色許男命に命じて天神地祇の社を定め、至る所の神々に幣帛を奉り給うた。これによつて疫病がやんで、國内が安らかになつた。

意富多多泥古命が神の齋であるといふ譯はかうである。かの活玉依毘賣は非常な美人であつたが、ある夜美しい男が姫の許に來た。そして兩人相愛して、男夜毎に通ひ來る内に、幾もなく姫は妊つた。姫の父母はその譯を責め問ふと、姫は止むを得ずかやう〳〵と誠のことを語つた。よつて父母はその男の何人であるかを知らうとおもつて、女に教へて麻糸をつけた針を男の衣の裾に刺さ

せた。さて翌朝になつて見ると、麻糸は戸の鉤穴から抜けて、あとには糸が三卷だけ殘つてゐた。その糸を辿つて行つて見ると、三輪山の神社に止まつてゐる。そこで神の子だと解つた。三輪の名は糸が三卷殘つた事から起つたのである。

この御世に、大毘古命を越國(北陸道)に、その子建沼河別命を東海道に、日子坐王をば丹波國に遣して、之を平定せしめ給うた。大毘古命が越國に行かれる時に、腰裳を着た少女が山城の平坂に立つて、次の歌を歌うた。

こはや、御眞木入日子、御眞木入日子はや。」おのが緒を、竊み弑せむと、後つ戸從、い行き違ひ、前つ戸從、い行き違ひ、窺はく、知らにと、御眞木入日子はや。

大毘古命これを聞いて不思議に思ひ、その意味を尋ねられたが、少女はこれに答へずして行方も知らず消えうせた。命はそこで立ちかへつて天皇にこの事を奏上されると、天皇、「それは多分わが繼兄の建波邇安王の謀反心を起したしるしであらう、」と仰せられて、大毘古命に日子國夫玖命を副へて征伐に遣された。建波邇安王は防ぎ戰うたが、國夫玖命の放つた矢に射あてられて死んだので、その軍隊は逃げ散つた。大毘古命はこの由を天皇に奏して後越國に行かれた。

かくて天下は安らかに治まり、民は富み榮えた。そこで始めて男の弓端の調、女の手末の調を貢らしめ給うた。この天皇御年百六十八歲。御陵は山邊の道勾之岡の上にある。

垂仁天皇　伊久米伊理毘古伊佐知命は磯城の玉垣宮にいられて天下を治め給うた。佐波遲比賣命の御腹に品牟都和氣命、次に沐羽州比賣命の御腹に印色之入日子命、大帶日子淤斯呂和氣命、大中津日子命、倭比賣命、若木入子命、次に沼羽田之入比賣命の御腹に沼帶別命、伊賀帶日子命、次に阿邪美能伊理毘賣命の御腹に伊許波夜和氣命、阿邪美都比賣命、次に迦具夜比賣命の御腹に遠邪辨王、苅羽田刀辨の御腹に落別王、五十日帶日子王、伊登志別王、次に弟苅

羽田刀辨の御腹に石衝別王、石衝毘賣命、凡て十三柱の皇子、三柱の皇女があらせられる。大帶日子淤斯呂和氣命は後讓を受け給うた。御身の長一丈二寸、御脛の長さ四尺一寸あつたといふ。倭比賣命は伊勢大神宮に仕へ給うた。

初め天皇沙本毘賣を后となさつた時に、姫の御兄沙本日古王姫に向つて、「お前は夫と兄とどちらを愛するか、」と尋ねなさつた、すると姫は「兄君の方を愛します、」とお答へなさつた。兄君、「お前が誠に私を愛するならば、二人もろともに天が下の主とならう、」と仰せられ、鋭利な短刀を授けて、天皇のお寢みなさつた隙を覗うて刺殺し奉れといはれた。天皇はかくとは夢にも御存じなく、后のお膝を枕に寢んでおいでになる時、后は授けられた短刀でお首を刺さうと三度まで振りかざゝれたけれども、刄をあつるに忍びず、哀しさのあまりに覺えずお涙を天皇のお顏の上に落し給うた。天皇お目をお醒しなさつて、「おれは今不思議な夢を見た、佐保の方から俄雨が降つて來ておれの顏を濡した。また錦の色をした小さな蛇がおれの頸にからんだ。この夢は一體何の兆だらう。」と

仰せられた。后は今はつゝみかねて、かやう〳〵とありし次第をうちあけ給ふと、天皇は怒つて軍をおこして沙本毘古王を討たしめたまふ。王は丈夫な城を築いて防ぎ戰はれる。沙本毘賣命は兄を思ふの情にたへず、遁れ出でてその城に行かれた。この時后は姙つていらせられた。天皇は后の上を悲しんで、急にその城を攻めかれられた。その内に御子がお生れになつた。そこでその御子を城の外に置いて、天皇に、「この御子をばわが子と思召さば育てゝ下さいませ、」と仰せられた。天皇は兄を惡んでも、后をば愛してゐられたので、軍卒の力强い者に命じて、子と共に母をも無理やりに引つ張つて來いと仰せられた。后はこれを豫知して、髮を剃つてその髮で頭を掩ひ、玉の緒を腐らして手に纏き、酒で衣を腐らして普通の衣の如く見せかけ、さてその子を抱いて城の前にさし出された。軍卒どもその御子を取り奉り、次に母君をも捕へ奉らうとしたが、髮を引けば髮が落ち、御手を取れば玉の緒がきれ、衣服を攫むと衣服が破れて捕へ申すことが出來なかつた。かへつてこの由を天皇に申しあげると、天皇は限

りなく悲しみたまふ。さて、天皇は后に向つて、「子の名は母がつけるものに極つてゐるから、お前この子の名をつけて呉れ、」と仰せられると、「后、城を燒いた時に火の中にお生れになつたから、本牟智利氣御子とおつけなさいませ、」と申したまふ。天皇更に、「この子はどうして育てたらよからう。」といはれると、后は「乳母を取つてお育てなさいませ」といはれる。最後に、「お前の代りに誰を后にしたらよからう、」と問はれると、后、「旦波比古多多須美智能宇斯王の二人の女、氷羽州比賣命、沼羽田之入毘賣、この姉妹をお納れなさいませ、」と答へられた。かくて沙本比古王が殺された時后も共に失せ給うた。

然るにこの御子鬚が胸先に及ぶ頃までも物をいふことがお出來なさらぬ。ある時空高く飛ぶ鶴の聲を聞いて片言をいはれたので、山邊之大鷦といふものを遣してこの鳥を捕へさせられた。そこでこの人は紀伊から、播磨、因幡、丹波、但馬、近江、美濃、尾張、信濃、越の諸國を追ひ廻つて漸くにして捕へ歸つて奉つた。そこでこれを御子に見せられたが何の甲斐もなかつた。

天皇これを憂へながら御やすみになつた時、夢に、「わが家を天皇の御家のやうに作つて下さるならば、御子が物をいへるやうにしてあげませう、」と申すものがあると見て、お覺めになつた。天皇がこれは何神であらうと占はせて御覽になると、出雲大神の祟だといふ事がわかつた。そこで御子に曙立王をそへて出雲の大神宮に詣でさせなさつた。王は天皇の命によつて、果して靈驗あるかどうかを試すために、池の樹にゐる鷺を見て、神に祈つて、「若し靈驗あるならば落ちよ。」といはれると、鷺は地に落ちて死んだ。更に「生きよ、」といはれると生き返つた。又甘白檮の崎にある樫の木に對して同じことを繰返されると樫は枯れてまた生きた。

さて出雲について大神を拜し訖つてお歸りなさる時、簸河の中に假宮を作つてそれにゐられると、出雲の國造の祖の岐比佐都美といふものが青葉の山を飾つて川下に立つて御食をたてまつらうとする時、「あれは大國主神を祭る神主の庭か、」と尋ねられた。王たちは之れを聞いて非常に喜んで早馬の使を以つてそ

の由を天皇に奏上した。皇子は檳榔の長穗宮にゐて、一夜、肥長比賣を妻として給うたが、後、姫をそつと窺いて見られると意外にも蛇であつたので、恐れて遁げ出し給うた。肥長比賣は別を惜んで、海原を光して船から追つかけて來たのを漸くに遁げ延びて都にかへられた。天皇は菟上王を遣して神宮を作らせ給うた。

天皇は后の言に從うて美智能宇斯王の二人の女を入内せしめ給うた。なほその妹歌凝比賣命、圓野比賣命をも召されたが、その二人は醜かつたのでかへされた。圓野比賣はこれを耻ぢて相樂に到られた時に樹の枝にさがつて死なうとされた。よつてこの地を懸木といつたのを今相樂といふのである。遂に弟國で深い淵に墜ちて死なれた。よつてこの地を墮國といふ。今は弟國と書く。

又、天皇は多遲麻毛理を常世の國につかはして登岐士玖迦玖木實（四時ある香しき果）を求めさせたまうたが、枝のまゝ持ちかへつて見ると天皇はもはや崩御の後であつた。多遲麻毛理はその半をわけて大に后に獻り、半を御陵にか

けて泣き死んだ。その木實は今の橘である。

天皇御年百五十三歲。御陵は菅原の御立野の中にある。

景行天皇

大帶日子淤斯呂和氣天皇は卷向の日代宮にいらせられて天下を治め給うた。針間之伊那毘能大郎女の御腹に櫛角分命、大碓命、小碓命、また の名は倭男具那命、倭根子命、神櫛王、次に八坂入日賣の御腹に若帶日子命、五百木之入日子命、押分命、五百木之入日賣命、次に御名の傳はつてゐない他の御妾の御腹に豐戸分王、沼代郎女、次に同じき今一人の御妾の御腹に沼名木郎女、香餘理比賣命、若木之入日子王、高木比賣、弟比賣命、次に日向之美波迦斯毘賣の御腹に豐國分王、次に伊那日能若郎女の御腹に眞若王、日子人之大兄王、次に訶具漏比賣の御腹に大枝王、以上二十一柱の御子の外に猶五十九柱、あはせて八十柱の御子があらせらる。

天皇神大根王の女兄比賣、弟比賣の二人が美人であるといふ事をお聞きになつて、大碓命を遣して召させ給うた。然るに大碓命はこれを自分の妻として、

天皇には僞つて他の女をさしあげられた。天皇はその替玉であることを御存じで、その女をお召しなさらない。さて大碓命は兄比賣、弟比賣に各一人の御子を生ませられた。

天皇小碓命に向つて、「お前の兄の大碓命は一向朝夕の食事に出て來ないのは何故だらう、前の樣に出て來るやうにお前からいへ、」と仰せられた。その後五日經つてもなほ出て來られないので、天皇は再び小碓命に、「お前の兄はどうして出て來ないのか、まだ話さずにゐるのか、」と尋ね給ふと、命は、「もう話しました、」と答へられた。天皇なほも、「どういふ風に話したか、」とお尋ねなさると、命、「朝厠に行く所を待ち受けて、ひつつかまへて手足をもいで、死骸を薦に包んで棄てゝしまひました、」と答へられた。

天皇はこの御子の勇猛なのを恐れ給うて、「西の方に熊曾建の兄弟がある。この二人は朝廷に從はぬ無禮者であるから殺して來い、」といひつけて遣された。命はこの時まだ額髮を落さぬ少年であらせられた。さて姨君の倭比賣命の御衣

と御裳とを貰つて、小さな刀を懷に入れて出かけられた。熊曾建の家に行つて御覽になると、丁度新築祝をしようと準備をしてゐる。命はその日を待ちうけて、乙女の髮を結ひ、姨上の衣や裳を着けて、少女の姿に扮裝ち、女共の中に交つてその家の內に入つて行かれた。兄弟の熊曾建は命の美しい女姿に見惚れて、二人の間に置いて離さない。酒宴のまさに酣なる頃、命は懷から刀を出して、兄建の衣の衿を捕へて胸を刺し通された。弟建恐れて逃げ出す所を梯子の下で追つついて尻から刺し通し給ふ。その時弟建、「しばらくお待ち下さいませ、申しあげることがあります、」といふ。命しばらく許して押し伏せ給ふと、「あなたは何人であらせられます、」と尋ねる。命、「おれは大帶日子淨斯呂和氣天皇の皇子倭男具那王であるぞ、」と答へ給ふ。建、「誠にさうであらせられませう。西の方には私共二人より强い者はゐませぬ。しかるに大倭國には私共よりも强い方がいらせられた。よつて倭建御子と申しませう、」と申す。かくいひをはるや、命は熟した瓜のやうに切り裂いて殺された。これから命を倭建命

ともいふ。

歸途に出雲國にいらせられ、出雲建を殺さうと思つてかれと交り給うた。そこで赤檮の樹で僞太刀を拵へて腰に佩き、共に簸河に水浴をなされた。さて命はまづ河から上つて出雲建の太刀を佩き、「刀を取り換へよう、」と仰せられると、出雲建も河から上つて命の僞太刀を取つて佩びた。その時命は、「さあ試合をしよう、」と刀を拔かれる。出雲建も刀を拔かうとしたがいかなこと拔けぬ。そこで命は何の事もなく出雲建を殺し給うた。その時の命の御歌、

八雲さす、出雲建が、佩ける太刀、黑葛多卷き、眞身なしにあはれ。

かくて命は平定し終へて都に上り、このよしを奏上し給うた。

天皇はまた東の方を平定せよと仰せられて御鉏友耳建日子をさし副へて命をさし遣し給ふ。命は伊勢の大神宮に參詣したまひ、さて姨君の倭比賣命にお會ひなさつて、「天皇は私を西の方の惡人どもを平げに遣されましたが、首尾よく平定してかへりましてからまだ幾時も經たない内に、今度はまた東の方の惡人

共を平げに遣しなさるのはどういふ譯でせう。大方私が早く死ねばよいと思召すのにちがひありません。」といつて泣きながら別を告げられた。倭比賣命はこれを慰め、草那藝劍を授け、また囊を與へて、「もし危いことが起つたらば、この囊の口をお開きなさい、」と仰せられた。

かくて命は尾張國に入らせられ、美夜受比賣の家に宿り、還り上る時に妻としようと約して、なほ東國の方にいらせられ、その地その地の荒神や賊等を悉く平げ給うた。相模國にお出でなされた時、その國造が詐つて、「この野の中に大きな沼があります、その沼の中に荒神が住んでをります、」といつて野の中に誘ひ入れ申して、その野に火をつけた。命は欺されたと思召して、姨君が授けなさつた囊をお開きなされると、火打が入つてゐた。そこで刀を以て草を苅り拂ひ、火打を以て火を打ち出してこつちからも火をつけて燒き退け、その國造を切り滅された。今その地を燒津(駿河)といふ。

それから走水海を渡り給ふ時、その渡の神が浪を起した爲に、船が波に搖

られ漂うて進み給ふ事が出來ない。その時妃弟橘比賣は、「私はあなたに代つて海に入りませう、あなたは首尾よく國々を撥ひ平げてお歸りなさいませ、」と申されて、菅疊八重、皮疊八重、絹疊八重を波の上に敷いて、その上にお坐りなさつた。すると荒波が自ら靜つて、船が進むことが出來た。その時の妃の御歌。

眞嶺さし、相模の小野に、燃ゆる火の、火中に立ちて、問ひし君はも。

七日の後妃の御櫛が海邊に流れ寄つた。その櫛を拾つて御陵を作つた。

それからなほも進んで蝦夷共を平げ、山河の荒神どもを從へて、還り上り給ふ。足柄山を超え給ふとて、坂の上に上つて、幾度も歎いて、「吾妻はや」と仰せられた。そこでその國を阿豆麻といふのである。

それから甲斐國に出でて、酒折宮にいらせられた時、次の歌を歌ひ給うた。

新治、筑波を過ぎて、幾夜か寢つる。

その時御火燒の翁御歌を續いで次の如く歌つた。

日日並べて、夜には九夜、日には十日を。

そこで翁をほめて東の國造となされた。それから信濃國に超えて、科野之坂神を平げて尾張國に歸り、美夜受比賣の許に入られた。御食事の時比賣は大盃を捧げて献る。命比賣の被衣の裾に月經が著いてゐるを見て次の如く歌ひ給うた。

久方の、天の香山、利鎌に、眞渡る杙、弱細、手弱腕を、枕かむとは、吾は爲れど、眞寢むとは、吾は思へど、汝が著せる、襲の襴に、月立ちにけり。

美夜受比賣答へて歌ひ給うた歌、

高光る、日の御子、安見しし、吾が大君、新間の、年が來經れば、新間の、月は來經行く、諾なく、君待ち難に、吾が著せる、襲の襴に、月立ちにけり。

そこで美夜受比賣を娶り、草薙劍を姫の許に置き、伊吹の山の神を平げに行かれた。「この山の神は徒手で殺してやらう、」といつてお上りになると、大さ

牛程もある白い猪に出逢ひなさつた。「これは大方この山の神の使者であらう。今殺さなくとも、還りに殺すことにせう、」と高言を放ちながら登り給ふと、大氷雨を降らして、命はその爲御心地惱しくなり給うた。(かの白い猪は神の使者ではなくて、正しくその神であつたのを、高言を吐かれた爲にこの仕儀となつたのである。)かくて玉倉部の清水に到つて息ひ給うて稍快くなられた。

そこから多藝野に到り給ひ、「我が心常は空をも翔り行かうと思うたに、今我が足は歩み得ず舵の樣な形になつた、」と仰せられた。そこでこの地を多藝といふ。なほ行き給ふと、疲にたへず杖をついて歩まれた。よつてそこを杖衝坂(伊勢)といふ。尾津の崎の一松の許に行きつき給うた所が、かつてそこにお忘れなされた刀がまだ失せずにゐた。そこで詠まれた歌、

尾張に、直に向へる、尾津の崎なる、一松吾兄を、一松、人にありせば、太刀佩けましを、衣着せましを、一松吾兄を。

そこを發つて三重村に行かれた時に、「我が足は三重勾餅のやうになつて、ひ

どく疲れた、」と仰せられた。よつてこの地を三重といふ。そこから能煩野に到り給うた時に國を懷うて歌ひ給うた歌二首、

大和は、國の眞秀、疊付く、青垣山隱れる、大和し美し。

命の、全けん人は、疊孤、平群の山の、隱白檮が葉を、髻華にさせその子。

また歌ひたまうた歌。

はしけやし、吾家の方よ、雲井起ち來も。

この時御病氣が御危篤になられた。その時の御歌、

少女の、床の邊に、吾が置きし、劍の太刀、その太刀はや。

かく歌ひ終つてお隱れになつた。因て早打の馬でこの由を天皇に奏上した。

大和にゐられる妃及び御子たちは下つていらせられ、御陵を作り、そのめぐりの田地を徘徊しつゝ泣きながら次の歌を詠まれた。

靡附の、田の稻幹に、稻幹に、這ひ纏ふ、薯蕷葛。

この時命は大きな白鳥と化つて、天を翔つて濱の方に飛んで行かれた。后及

び御子たちは竹の苅杙に足を踏みぬいても、その痛さを忘れて泣きながらこれを追ひかけ給うた。その時の御歌、

淺小竹原、腰煩ひ、空は行かず、足從行くな。

海の潮の中に浸りながら追ひ行かれた時の歌。

海が行けば、腰煩む、大河原の、植草、海がは、蹈躇ふ。

又白鳥が飛んで磯におりゐ給うた時歌はれた歌、

濱千鳥、濱從ひ行かず、磯通ふ。

この四首は御葬の時に歌つた、因つて今でも天皇の御大葬に之を歌ふのである。

さて白鳥はそこから翔つて河内國の志紀に止まられた。因つてそこに御陵を作つた。これを白鳥御陵といふ。白鳥はそれから猶も天に飛び去られた。

この倭建命には、伊久米天皇(垂仁)の皇女布多遲能伊理毘賣命の御腹に帶中津日子命、次に弟橘比賣命の御腹に若建王、次に布多遲比賣の御腹に稻

依別王、次に大吉備建比賣の御腹に建貝兒王、次に玖玖麻毛理比賣の御腹に足鏡別王、又今一人の御妻の御腹に息長田別王、合せて六柱の御子があらせられる。帶中津日子命は後天皇の御位につかれた。

さて大帶日子天皇は御年百三十七歳、御陵は山邊の道の上にある。

成務天皇　若帶日子天皇は近江の滋賀の高穴穗宮にゐて天下を治め給うた。弟財郎女の御腹に和訶奴氣王が生れ給うた。建內宿禰を大臣として、國々の境、及び諸國の國造縣主を定め給うた。御年九十五歳。御陵は狹城の多他那美にある。

仲哀天皇　帶中日子天皇は穴戸(長門)の豐浦宮、及び筑紫の香椎宮にゐて天下を治め給うた。大中津比賣命の御腹に香阪王、忍熊王、次に息長帶比賣命の御腹に品夜和氣命、大鞆和氣命、又の名品陀和氣命、總て四柱の御子がゐられる。

天皇筑紫の香椎宮にゐ給うて、熊曾の國を平げようとなされた時、琴をひい

て、神の命を乞はれた。その時大后息長帶日賣命に神がお憑きになつて託宣を下されるやう、「西の方に國がある、金銀をはじめとして色々の寶が多い、今その國を汝に服從させよう、」と仰せられた。天皇答へて、「高い所に登つて西の方を見ますけれども見えるのは海ばかりで國はありません、」と仰せられ、これは僞の神にちがひないと思うて、琴をひくことをやめられた。そこで神は非常に怒られて、「この天が下は汝の治めるべき所でない、死んでしまへ、」と仰せられた。建内宿禰は大に氣遣うて、「御琴をおひきなさいませ、」と奏上したので、天皇しぶ〳〵ながら彈き給うたが、やがてその音が聞えなくなつた。火をあげて見ると天皇は早や崩御遊ばされてゐた。よつて殯宮にうつし奉り、國の大祓を行うて、宿禰再び神の命を乞ひ奉ると、「大后の腹にある御子が治めるべき國である、」と仰せられた。宿禰重ねて、「かく敎へ給ふ神の御名をお知らせ下さいませ、」と申すと、「これは天照大御神の御心である。また底筒男、中筒男、上筒男の三柱の神である。今その國を求めたいと思ふなら、天つ神國つ神に幣を

奉り、我が魂を船に乘せて渡れ、」と仰せられた。よつてその通りにして、軍兵を整へ、船を並べて渡り給ふと、海中の魚共が御船を負うて渡つた。かくて新羅の國に渡つて國の中程まで攻め入り給ふと、その國王は降伏して、「これから永久屬國となりまして、毎年貢物を献上致します、」と申した。そこで墨江大神、即ち三柱の筒男命の御魂を祭つて鎭守の神として還り給うた。

大后韓國御征討の半に御腹の御子がお生れなされさうであつたので、石を取つて腰に挾んで腹を鎭め、筑紫に還啓の後にその子をお生みなされた。

息長帶日賣命は謀反の者がありはせぬかとと氣遣つて御子はおかくれになつたと言ひ觸させて、大和に還り上り給うた。香坂、忍熊の二王はこれを待ちうけて討たうと思ひ、兎餓野に出て占獵をされた。しかるに大きな猪が出で香阪王を喰ひ殺した。忍熊王はそれでもかまはず待ち迎へて戰をしかけられる。忍熊王の方の大將は伊佐比宿禰、太子の方の大將は難波根子建振熊命である。官軍は敵を追うて山城に到つたが、賊は逆襲して來て、頑强に抵抗するので、

建振熊命は大后が崩御なされたと詐つて、弓の弦を切つて和を乞うた。伊佐比宿禰心を許して弓の弦をはづし武器をしまひ込んだ。これを見すまして急に髻の中から弦を出して弓に張り、急に攻めた。賊は逢阪山に逃げ退くを追擊して、近江の沙々那美に於いて鹽にした。忍熊王は追ひつめられて伊佐比宿禰と船に乘り、湖水に浮び、次の歌を詠まれた。

率、吾君、振熊が、痛手負はずは、鳴鳥の、近江の、海に潛きせな我。

かく歌ひをはつて海に入つて死なれた。

建内宿禰命は太子をお連れ申して秡するために近江及び若狹を經めぐつた。越の角鹿(敦賀)に假宮を作つてゐ給ふ時、その地の伊奢沙和氣大神が、夢に太子の御名を貰つて我が名にしたいといはれたので、その請に從ひ給うた。

さて還り上られた時、母君は太子に待酒を獻つて、次の如く歌ひ給うた。

この御酒は、吾が御酒ならず、造酒の神、常世に坐す、石立たす、少名御神の、神壽、壽狂ほし、豐壽、壽廻し、獻り來し御酒ぞ、涸さず飲せ誘。

建内宿禰は太子に代つて次の如く歌つた。

この御酒を、釀みけむ人は、その皷、臼に立てゝ、歌ひ〻ゝ、釀みけれかも、舞ひつゝ、釀みけれかも、この御酒の、御酒のあやに、轉樂し誘。

帶中津日子天皇は御歳五十二歳。御陵は河内の餌香の長江にある。

應神天皇 品陀和氣命は輕島の明宮にいらせられて天下を治め給うた。高木之入日賣命のお腹に額田大中日子命、大山守命、伊奢之眞若命、大原郎女、高日郎女、次に高木之入日賣命の御妹中日賣命の御腹に木之荒田郎女、大雀命、根鳥命、次に中日賣命の御妹弟比賣命の御腹に阿倍郎女、阿貝知能三腹郎女、木之菟野郎女、三野郎女、次に宮主矢河枝比賣の御腹に宇遲之和氣郎子、八田苦郎女、女島王、次に矢河枝比賣の御妹袁那邊郎女の御腹に宇遲之若郎女、次に息長眞若中比賣の御腹に若沼毛二俣王、次に糸井比賣の御腹に速總別命、次に日向之泉長比賣の御腹に大羽江王、小羽江王、幡日之若郎女、次に迦具漏比賣の御腹に川原田郎女、玉郎女、忍坂大中比賣、登富志郎女。迦多遲王、次

に葛城之野伊呂賣の御腹に伊奢麻能和迦王、合せて十一皇子十五皇女があらせられる。

天皇大山守命と大雀命とに、「お前たちは年上の子と年下の子とはどちらが可愛いか、」とお尋ねなされた。これは宇遲能和紀郎子に位を讓りたいと思されたからである。大山守命は「年上の子が可愛うございます、」といはれたが、大雀命は天皇の御心を察して、「年下の子はまだ成人してゐませんから一層可愛うございます、」と答へられた。天皇は、「よくいつた、おれもさう思ふ、」と仰せられて、大山守命は海山のことを司り、大雀命は天下の政を執り、宇遲能和紀郎子は天皇の御位を繼ぎ給ふやうに云ひ渡された。

嘗て天皇近江に行幸の折、宇治野に立ち、葛野を見て歌ひ給ふ樣、

千葉の、葛野を見れば、百千足、家庭も見ゆ、國の秀も見ゆ。

木幡村で美しい少女にお逢ひなされた。その名を尋ね給ふと、丸邇之比布禮能意富美が女宮主矢河枝比賣と申すと答へた。明日の再會を約して、さて翌日還

幸の時姫の家を尋ね給ふと、姫の父は喜んで家を飾つて待ち奉つた。御食事の折姫盃を献ると天皇これを受けながら詠み給うた、

この蟹や、何處の蟹、百傳ふ、角鹿の蟹、横去ふ、何處に到る、市路島、三島に速來、鳴鳥の、潜き息づき、階撓ふ、小涙路を、すぐ〳〵と、吾が往ませばや、小幡の道に、遇はしし少女、後方は、小楯かも、齒並は、椎實なす、櫟井の、丸邇阪の土を、初土は、膚赤らけみ、下土は、丹黑き故、三栗の、その中土を、頭衝く、眞日には當てず、眉畫き、濃に畫き垂れ、遇はしし女、」彼もがと、我が見し兒等、此もがと、我が見し兒に、宴酣に、向ひ居るかも、い副ひ居るかも。

かくてこの姫を妻としてお生れになつたのが宇遲能和紀郎子であらせられる。

天皇は日向國の諸縣の君の女髮長比賣が美人であることをお聞きになつて召し上せ給うたが、姫が難波に泊いた時、大雀命これを見そめ給うて、建内宿彌を介して、私に下さいと仰せられた。天皇よつてこれを許し給うた。御酒宴の

時姫を命に賜ふとて天皇が詠みになつた歌二首、

率子共、野蒜摘に、蒜摘に、吾が行く道の、香細し、花橘は、上枝は、鳥居枯し、下枝は、人取枯し、三栗の、中枝の、ほつもり、赤嬰子を、率誘さば、宜らしな。

水停る、依網の池の、堰杙打ち、菱殼の、刺しける不知に、蓴繰り、延へけく不知に、吾が心しぞ、彌愚にして、今ぞ悔しき。

大雀命姫を賜はつて後詠み給うた歌二首。

道の後、巨田少女を、神の如、聞えしかども、相枕纏く。

道の後、巨田少女は、爭はず、寢しくをしぞも、愛み思ふ。

又吉野の民が大雀命の佩いてゐられた刀を見て詠んだ歌。

品陀の、日の御子、大雀、佩かせる太刀、本劍、末振ゆ、冬木如、さや〳〵。

又吉野の白檮生で酒を釀して之を献る時、舌鼓をうち歌舞をして歌つた歌。

白檮生に、横臼を作り、横臼に、釀みし大御酒、美味に、聞しもち食せ、吾君。

この御代に劍池、百濟池が作られた。亦百濟から牡馬牝馬各一疋を阿知吉師といふ者につけて献つた。又百濟國に賢人を献れと命ぜられた時、和邇吉師といふ者に論語十卷、千字文一卷をそへて献つた。又鍛工、織工をも献つた。又酒を釀すことを知つてゐる仁番、又の名須々許理といふ者も渡つて來た。この者酒を釀して献つた時、天皇その酒に醉ひ浮かれて詠み給うた歌、

須々許理が、釀みし御酒に、吾醉ひにけり、」事和酒、咲酒に、吾醉ひにけり。

天皇崩御の後大雀命は天皇の仰に從うて宇遲能和紀郎子に讓られたが、大山守命は天下を取らうと思つて、兵を起して弟皇子を殺さうと謀られた。大雀命は之を知つて弟皇子に告げ給ふ。そこで宇治川の邊に伏兵を置き、山の上に幕を張つて王がゐられる如く裝ひ、兄王の川を渡られる時のために船を用意し

て、弟王みづら船人に身を窶して待つてゐられた。兄王は兵士を隱し、鎧を衣の下に着て河邊に來られ、向うの山を見て弟王はそこにゐられると思つて船に乘られた。さて船が川の中程に來た時その船を傾けて、水の中に墮し入れた。兄王は浮き上つて水に流されながら次の歌を詠み給うた。

千早振、宇治の渡に、棹取に、速けむ人し、吾が許に來む。

その時河邊にあつた伏兵は一時に起つて射殺し奉つた。兄王は遂に河原の崎で沈まれた。そこで鉤でその沈まれた所を探ると、鎧がかわらと音がしたので、その地名は起つたのである。屍骸が上つた時、弟王の詠まれた歌、

千早人、宇治の渡に、渡瀨に立てる、梓弓眞弓、射放らむと、心は思へど、殺らむと、心は思へど、本方は、君を思ひ出、末方は、妹を思ひ出、苛痛く、其に思ひ出、悲しけく、此に思ひ出、射放らずぞ來る、梓弓眞弓。

大雀命と宇遲能和紀郎子とは長い間天下を讓り合ひ給うた。海人貢物を奉ると、兄王には弟王に獻れと仰せられ、弟王はまた兄王に獻れと仰せられ、かく

讓り合ひ給ふことが一度や二度でなかつたので、海人は往還に疲れて泣いたといふ。然るに弟王は早世なされたので、遂に兄王が位に即き給うた。

昔、新羅王の子天之日矛といふ人が渡つて來た。これには所以がある。かの國に一人の賤の女が沼の邊に晝寢をしてゐると、虹の樣な日光が陰部を照した。一人の賤の男がこれを見て不思議に思つてゐると、女は間もなく妊んで赤玉を生んだ。男はこれを貰つて常に腰につけてゐた。この男谷の中に田を作つて居たので、作人共の食物を牛に負はせてそこに行つてるところに天之日矛が出逢つて、大方牛を殺しに行くのだらうといつて、その男を獄屋に入れようとした。男はどう辯解しても赦されないので、最後にかの赤い玉を天之日矛に賄して漸くにして赦された。天之日矛はその玉を床に置くと美しい少女となつたので、これを妻とした。妻はよく夫に事へたが、夫は心奢つて惡口をしたので、妻は「親の國に行つてしまひます、」といつて小船に乘つて渡つて來て難波に止つた。天之日矛も妻を追うて渡つて來たが、渡の神に支へられて難波に行くこ

とが出來ず、但馬國に止り、前津見を妻としその子孫が絶えずにゐる。

天日矛が渡つて來た時に、鏡玉等の八種の寶を持つて來た。これが出石の大神である。この神の女を伊豆志袁登賣神といふ。多くの神々はこの伊豆志袁登賣を得ようとしたが成功しなかつた。玆に秋山之下冰壯夫、春山之霞壯夫といふ兄弟があた。その兄が弟に向つていふやう、「おれはあの伊豆志袁登賣を我が物とせうとしたが成功しなかつた。お前は手に入れる事が出來るか、」といふと、弟答へて、「それは譯もない事だ、」といふ。兄、「お前が若し手に入れる事が出來るなら、衣物を脱ぎ、身の丈の高さの瓶に酒を釀し、また山川の物を悉く備へて、これを賭けよう、」といふ。弟この由を母に訴へると、母は藤の蔓で衣や袴を作り、また弓矢を拵へて彼に與へた。弟はその衣袴を着、弓矢を以てかの少女の許に行くと、衣服も弓矢も悉く藤の花となつた。さてかの少女と逢うて、首尾能く夫婦となつたが、兄は先の約束を守らず、賭物を償はうとしない。弟はこの由を母に訴へると、母は兄の所爲を面白からず思つて、出石河の河島

の一節竹で目の荒い籠を作り、河の石を取つて、鹽と合せて、その竹の葉に包み、「この竹の葉の萎むか如萎め、この潮の干るが如干よ、この石の沈むが如沈め、」と詛はせた。そこで兄は八年の間病み衰へて苦しんだ。兄は到頭降參して詫をいひ、その詛の品を去つて貰つて、漸くの事で本のやうな安らかな身となつた。これが物を賭けて誓を立てることの初である。

品陀天皇は御年百三十歲。御陵は河内の餌香の藻伏岡にある。

仁德天皇

大雀命は難波の高津宮にいらせられて天下を治め給うた。大后岩之日賣命の御腹に大江之伊那本和氣命、墨江之中津王、蟹之水齒別命、男淺津若子之宿禰命、次に髮長比賣の御腹に波多毘能大郎子、またの名は大日下王、波多毘能若郎女、またの名は長日比賣命、またの名は若日下部命、合せて六柱の皇子があらせられる。また庶妹の八田若郎女及び宇遲能若郎女をも娶られたが、このお二人の腹には御子がお出來にならなかつた。

この御世に茨田堤、和淵池、依網池を作り、難波の堀江、小橋江を掘り、黑

江之津を定めらした。

天皇高い山に登り給うて、四方の國を見給うて、國の中に烟が立たないのは、人民が貧窮してゐるのであらうと仰せられて、三年の間課稅を免じ給うた。そのために御殿は壞れて雨が洩ろけれども修繕もなさらない。後國を御覽になると國内には煙が充ちてゐた。そこで今は人民が富んだなと思召して課稅をおほせつけ給うた。故に後世この天皇の御代を稱へて聖帝の世といふ。

大后石之日賣命は非常に嫉妬深い御方であつた。多くの妃達に平生に違つた振舞でもあれば、足摺をして妬まれた。ある時天皇吉備海部直が女の黑日賣が美人だといふことをお聞きになつて召し寄せ給うたが、姫は大后の嫉妬の甚いのに恐れて本國に逃げ歸つた。天皇高樓に上り姫の船出を見て詠み給うた歌、

沖邊には、小舟連く、黑崎の、紅顏兒吾妹、國へ下らす。

大后はこの歌を聞いて非常に怒り、人をつかはして黑日賣を船からおろし、陸から追ひ放はれた。天皇は黑日賣を戀うて、大后を欺いて、淡路島を見に行く

と仰せられてお出かけになつた。さて淡路島についてお詠みになつた歌、

襲立るや、難波の崎從、出で立ちて、我が國見れば、淡島、磯馭盧島、檳榔の、小島も見ゆ、佐氣都島見ゆ。

それから吉備國に行き給うた。黑日賣は天皇にさしあげるために青菜を摘みに行つた。そこに天皇もお出掛けになつてお詠みになつた歌、

山方に、蒔ける青菜も、吉備人と、共にし摘めば、樂しくもあるか。

天皇上り給ふ時に黑日賣の獻つた歌、

大和方に、西風吹き散げて、雲離れ、退き居りとも、吾忘れめや。

大和方に、往くは誰が夫、隱水の、下從延へつゝ、往くは誰が夫。

後大后は宴會を催すために、御綱柏を採りに紀國にお出でになつた。その留守に天皇は八田若郎女をお召しになつた。大后は御綱柏を船に一杯積んでお歸りになつたが、途中で、天皇は八田若郎女と夜晝戲れてゐられますと告げ奉るものがあつたので、大后は怒つて御綱柏を悉く海に投げ入れなさつた。よつてこ

の地を御津の崎といふ、さて大后は船を難波にはつけず、堀江を泝り、河を傳うて山城に行き給うた。その時の御歌。

繼苗生や、山城川を、川上り、吾が上れば、河の邊に、生ひ立てる、烏草樹を、烏草樹、其が下に、生ひ立てる、葉廣、五百箇眞椿、其が花の、照り坐し、其が葉の、廣り坐すは、大君ろかも。

山城から奈良の山の口に到つて詠み給うた歌、

繼苗生や、山城川を、宮上り、吾が上れば、青土よし、奈良を過ぎ、小楯、大和を過ぎ、吾が見が欲し國は、葛城高宮、吾家の邊。

かくて倭に還つて綏喜の奴里能美といふ韓人の家に入り給うた。天皇は大后が山城から大和にお出でになつたといふことをお聞きになつて、鳥山といふ舍人を使として、次の歌を大后の許にお贈りなされた。

山城に、追及け鳥山、追及け〳〵、吾が愛妻に、追及き遇はむかも。

またその後に口子といふ者をつかはして次の歌をお贈りなさつた。

御室の、其の高城なる、大井子が原、大井子が原にあり、肝向ふ、心をだにか、相思はずあらむ。

繼苗生、山城女の、小鍬持ち、打ちし大根、根白の、白き腕、纏かずけばこそ、知らずともいはめ。

口子がこの歌を申し上げる時、大雨が降つてゐた。その雨をも厭はず、表の方に參ると、大后は裏の方にかはし、裏の方に廻ると、表の方に避け給うて一向お逢ひなさらなかつた。口子は困つて庭に跪いてゐると、雨水が腰まで及び、青い衣が紅い紐の色に染んで赤くなつた。口子の妹口比賣が大后に仕へてゐたが、この有樣を見て次の歌を詠んだ。

山城の、綏喜の宮に、物申す、吾が兄の君は、涙ぐましも。

大后その譯を問はれると、「あれは私の兄の口子でございます、」と答へた。

そこで口子、口比賣、奴理能美の三人は相談して天皇に、「大后がこゝにいらせられる譯は奴理能美の家に、蟲になつたり、卵になつたり、飛ぶ鳥になつた

りする不思議な蟲（蠶をいふ）がありますが、それを見にいらせられましたので、別段の譯がありなさるのではございませぬ、」と申しあげた。天皇は、「ではおれもその蟲を見に行かう、」と仰せられて、難波から奴理能美の家に入らせられた。よつて奴理能美はその蟲を大后に献つた。天皇大后のゐ給ふ殿の入口に立ちてお詠みなされた歌、

繼苗生、山城女の、小鍬持ち、打ちし大根、清々に、汝が言へせこそ、打ち渡す、彌木榮なす、來入り參來れ。

天皇はまた八田若郎女を戀うて、歌を詠んで遣はされた。その歌、

八田の、一本菅は、子持たず、立ちか荒れなむ、可惜菅原。」言をこそ、菅原といはめ、可惜清し女。

八田若郎女が答へて申しあげた歌、

八田の、一本菅は、獨り居りとも。」大君し、可しと聞さば、獨り居りとも。

天皇はまた、御弟速總別王を媒として、繼妹の女鳥王を妃に召さうとなされた。しかるに女鳥王は速總別王に申されるやう、「大后の嫉妬がひどいので、八田若郎女はあの通りでございますから、私は迚もお仕へすることは出來ますまい。それよりもいつそあなたの妻となりませう、」といはれた。速總別王はよつて女鳥王を娶つて、天皇へは何とも申しあげずに置かれた。然るに天皇自ら女鳥王の許に來給うて、閾の上に立たれた。その時女鳥王は機を織つてゐられたので、天皇は次の歌を詠み給ふ。

女鳥の、吾が王の、織す服、誰が料ろかも。

女鳥王の答へなされた歌、

高行くや、速總別の、御襲料。

天皇はその意味を察して宮に還り給うた。この時、夫速總別王が歸られたので、女鳥王歌ひ給ふやう、

雲雀は、天に翔る、高行くや、速總別、鷦鷯取らされ。

天皇この歌を聞いて兵を起して二人を殺さうとなされた。二人は逃げて倉梯山

に登られた。この速總別王のよまれた歌、

梯立の、倉梯山を、嶮しみと、岩掻きかねて、吾が手取らすも。

梯立の、倉梯山は、嶮しけど、妹と登れば、嶮しくもあらず。

そこから逃れて宇陀の蘇邇といふ所に到つて、遂に追手に殺されなさつた。

追手の兵の將山部大楯連は、女鳥王の御手の玉釧を取つて己が妻に與へた。後、宮中の御酒宴の時、かの妻この玉釧を自分の手に纏いて參つた。大后その玉釧を見知つてゐられて、大楯連を召し寄せ、臣子の分として、皇族の手に纏かれた玉釧を剝ぎ取つて妻に與へた不禮を責め給うて、死刑に行はれた。

ある時天皇酒宴を催す爲に日女島にいらせられた。その時、雁が卵を生んでゐたのを見給うて、建内宿彌を召して、雁の卵生む事を尋ね給うた、その歌、

魂來經、内の吾兄、汝こそは、世の長人、空見つ、日本の國に、雁子産と聞くや。

建内宿彌また歌をもて答へ奉るやう、

高光る、日の御子、宜しこそ問ひ給へ。吾こそは、世の長人、空見つ、日本の國に、雁子産と、未だ聞かず。

かく申して、御琴を請ひ受けて歌ふやう、

汝が皇子や、終に知らむと、雁は子産らし。

この御代に、兎寸川の西の方に一本の高い樹があつた。その影が、朝日にあたれば淡路島に達き、夕日にあたれば高安山を越えた。この樹を伐つて船を作つた所、船足が非常に速かつた。舟の名を枯野といふ。この船で、天皇の朝夕の御料の水を淡路島から取り寄せた。後これが破れたので、その材木で鹽を燒き、燒き殘りで琴を作つた所、その音が七里に響いた。そこで歌に、

枯野を、鹽に燒き、其が餘り、琴に作り、掻き彈くや、由良の門の、門中の、海岩に、振れ立つ、浸漬の木の、亮々。

天皇御年八十三歳。御陵は毛受の耳原にある。

履中天皇

伊邪本和氣命は磐余の若櫻宮にいらせられて天下を治め給うた。

黒比賣の御腹に市邊忍齒王、飼馬王、青海郎女、またの名は飯豐郎女、あはせて三人の御子がいらせられる。

初め難波の宮にいらせられた時、大嘗の大酒宴の後、酒に醉うて寢てゐられたのを、御弟の墨江中王が宮殿に火をつけて弑し奉らうとなされた。その時阿知直といふ者、天皇を盜み出し、馬に乘せ奉つて大和に逃げた。丹比野に到つてお目がさめて、「此所は何所か、」とお尋ねになつたので、阿知直斯樣々々と、ありし次第を申した。その時天皇歌ひ給ふやう、

丹比野に、寢むと知りせば、防壁も、持ちて來ましもの、寢むと知りせば。

埴生坂に至つて難波宮を顧み給ふと、猶火が炳く見えてる。又歌ひ給ふ樣、

埴生坂、吾が立ち見れば、火焔の、燃ゆる家群、妻が家の邊。

大阪の山口においでになつた時、一人の女におあひになつた。かれ申す樣、「多くの兵がこの山を遮つてをりますから、當麻路からおいでなさいませ、」というた。そこで天皇のお詠みになつた歌、

大阪に、逢ふや少女を、道問へば、直には告らず、當麻路を告る。

かくて石上神宮にいらせられた。そこに御弟の水齒別命が參られて、お目にかゝりたいと申された、天皇、「お前は墨江中王と同じ腹であるかも知れないから、逢はぬ、」と仰せられると、命、「決してその樣なことはありませぬ、」と答へられる。天皇、「ぢや墨江王を殺しておいでなさい、その時に逢はう、」と仰せられた。そこで命は難波に下つて、墨江中王の御側近く仕へる曾婆訶理といふ武士を欺いて、「若しお前が主君の墨江中王を殺して吳れるなら、おれが天皇となつて、お前を大臣にしてやらう、」と仰せられると、曾婆訶理は己が君の厠に入られた時を伺うて弑した。命は曾婆訶理を連れて大和に上られたが、大阪の山口に到つて心に思ひ給ふやう、「曾婆訶理は大功があるけれど主を殺した不義者である。生して置いては後の爲にならぬ。しかし功ある者を賞しないのは信がない、大臣になして後に殺さう、」と。そこで假宮を作つて酒宴を開き、曾婆訶理に大臣の位を賜ひ、さて面を隱す許の大杯に酒をつぎ、王子まづ自ら飲

み、次に曾婆訶理にさゝれた。曾婆訶理うけて飲む時杯で顔を掩うた。その時席の下に置かれた劍を取り出してその頸をお斬りになつた。さて大和に上つてこの由を奏上し給ふと、天皇召入れて對面し給ふ。又阿知直を厚く賞し給うた。

天皇御年六十四歳。御墓は毛受にある。

反正天皇　水齒別命は丹比の柴垣宮にゐて天下を治め給うた。御身長九尺二寸、御齒の長さ一寸、廣さ二分、上下揃うて甚だ美しかつた。都怒郎女の御腹に甲斐郎女、都夫良郎女、又都怒郎女の御妹の弟比賣の御腹に財王、次に多訶辨郎女、合せて四柱の御子がいらせられる。天皇御年六十歳。御陵は毛受野にある。

允恭天皇　男淺津間若子宿禰命は遠飛鳥宮にいらせられて天下を治め給うた。忍阪之大中津比賣命の御腹に木梨之輕王、長田大郎女、境之黑日子王、穴穗命、輕大郎女、またの名衣通郎女、八瓜之白日子王　大長谷命、橘大郎女、酒見郎女、合せて九柱の御子があらせられる。

天皇は御持病がおありなされて、位に即くことを躊躇なされたが、人々の乞によつて遂に即位し給うた。この時新羅から八十艘の貢物を献つたが、その使の金武といふ者醫の道を心得てゐて天皇の御病氣を癒し奉つた。

この御代に諸の氏姓の誤り違うてゐるのをお正しになつた。

天皇御年七十八歳。御陵は河内の餌香の長枝にある。

天皇崩御の後、木梨之輕王位に即き給ふ筈であつたが、御妹輕太郎女にたはけて次の歌を詠まれた。

足曳の、山田を作り、山高み、下樋を走せ、下聘に、吾が聘ふ妹を、下泣に、吾が泣く事を、今日こそは、易く肌觸れ。

小竹の葉に、打つや霰の、慥々に、寢れてむ後は、人議ゆとも。」愛しと、眞寢し眞寢てば、苅菰の、亂れば亂れ、眞寢し眞寢てば。

因つて百官を初め天下の民輕王を背いて、穴穗命に歸服した。そこで輕王は大前宿禰、小前宿禰の家に逃げこみ、兵器を作り備へられた。穴穗命も兵器を作

り且兵を起して輕王のゐられる家を圍み給ふ。その門に到られた時大氷雨が降つたので歌ひ給ふやう、

大前、小前宿禰が、金門蔭、かく寄り來れ、雨立ち止めむ。

宿禰手をあげ膝を打つて舞ひ、歌ひながら參つた、その歌、

宮人の、脚帶の小鈴、落去きと、宮人響む、里人も謹。

かく歌つて參つて申すやう、「兄君を御攻になつては世の人が謗ります。輕王は私が捕へてあげますから、兵をお引きなさいませ」と申す。よつてその言に從ひ給ふと宿禰は輕王を捕へて連れて參つた。その時輕王が詠み給うた歌二首、

天飛む、輕の少女、甚泣かば、人知りぬべし、羽狹山の鳩の、下泣に泣く。

天飛び、輕少女、下々にも、寄り寢て通れ、輕少女等。

さて輕王を伊豫の溫泉に流された。その時輕王の詠み給うた歌二首、

天飛ぶ、鳴も使ぞ、鶴が音の、聞えむ時は、吾が名問はされ。

大君を、嶋に放らば、船餘り、い還り來むぞ、吾が疊齋め。」言をこそ、疊

といはめ、吾が妻は謹。

衣通王(輕太郎女)歌を獻り給ふ。その歌、

夏草の、相偃の濱の、蠣貝に、足蹈ますな、明して通れ。

後戀しさに堪へず、王を追うて行き給ふ時に詠み給うた歌、

君が行、け長くなりぬ、接骨木の、迎を行かむ、待つには待たじ。

さて伊豫に著き給うた時、輕王待ちうけて、哀に思うて詠み給うた歌二首、

隱國の、長谷の山の、大峽には、幡張り立て、眞小狹には、幡張り立て、

凡墓にし、汝が定める、思妻あはれ。」槻弓の、伏る伏りも、梓弓、立てり

立てりも、後も取り見る、思妻あはれ。

隱國の、長谷の川の、上つ瀨に、齋杙を打ち、下つ瀨に、眞杙を打ち、齋杙には、鏡を掛け、眞杙には、眞玉を掛け、眞玉如す、吾が思ふ妹、鏡如す、吾が思ふ妻、在りといはばこそに、家にも往かめ、國をも偲ばめ。

かく歌うて共に自殺なされた。

安康天皇

穴穗御子は石上の穴穗宮にいらせられて天下を治め給うた。天皇根臣を大日下王の許に遣して、「お前の妹の若日下王を我が弟の大長谷命の妻に奉れ、」と仰せられた。大日下王は畏つた由を申され、禮物として押木之玉縵を献られたが、根臣はこれを盜み取つて、「大日下王は御命令に從はず、却つて陛下の惡口を吐きました、」と讒言した。天皇は非常にお怒りになり、大日下王を殺してその妃長田大郎女を皇后となさつた。

大日下王の御子目弱王は母に從うて宮中にあつた。ある時天皇晝寢をなされた。その時皇后に向つて、「おれは氣にかゝることが一つある。あの目弱王が成人して、おれがかれの父を殺した事を知つたなら、父の敵と狙ふことはあるまいか、」と仰せられた。目弱王はその時七歲になつて居たが、折しもその御殿の下に遊んでゐてこれを立ち聞いて、天皇の御寢みになるのを伺うて、傍の刀を取つて弑し奉り、邪夫良意富美が家に逃げ込んだ。

天皇御年五十六歲。御陵は菅原の伏見の岡にある。

大長谷王はこれを聞いて大にお怒りなされ、御兄黑日子王の許に到つてこの由を告げ、どうしたらよからうと御相談なさると、黑日子王は一向驚きもせず、平氣でゐられるので、その賴しげないのを怒り、刀を拔いて殺された。次に白日子王の許に行つてこのことを告げられたが、これもまた平氣でゐられたので、また怒つて、小治田に引張つて來て生埋にして殺された。

さて兵を起して都夫良意美の家を圍まれた。かれも亦待ち戰うて、射出す矢は葦の散る樣である。大長谷王矛を杖きながら、「我が先に娶らうといつた汝の女訶良比賣はこの家にゐるか、」と仰せられた。都夫良意美自ら出て、武器を解き捨て、八度拜していふ樣、「娘はさしあげませう。私はとてもあなたに勝つ事は出來まいと思ひます。併し一旦私を賴みにしていらせられた王は死んでもお棄て申す事は出來ませぬ。」かういつて武器を取つて還り入つて戰つた。さて力竭き、矢も亦盡きたので、王を刺殺し、自分も頸を切つて死んだ。

その後大長谷王は市邊之忍齒王を誘うて近江の久多綿之蚊屋野に狩に出かけ

られた。各假宮を作つて宿られたが、翌朝日もまだ出ぬ內、忍齒王は何心なく、馬に乘りながら、大長谷王の假宮の所に來て、「早く起し申せ、夜は早や明けた。獵場に御出かけになる時ぢや。」といつて立ち去られた。大長谷王の伴人は大長谷王に向つて、「變な物のいひ樣をなさる王でございますから、御用心なさいませ、」と申した。そこで大長谷王は甲を衣の下に着、弓矢を取つて馬に乘り、忽ち追付いて忍齒王を射落し、屍體を馬槽に入れて埋め給うた。

市邊王の御子意富祁王、袁祁王は之を聞いてお逃げになつた。大和の國で辨當を食べてゐられると、猪飼の老人が之を奪つた。かくて播磨の國に逃れて、志自牟といふ者の家に、馬飼牛飼となつて使はれていらせられた。

雄略天皇　大長谷若健命は長谷の朝倉宮にいらせられて天下を治め給うた。后若日下部王には御子がなく、都夫良意美の女韓比賣の御腹に、白髮命、若帶比賣命の二人の御子があらせられる。

初め、大后が河內の日下にゐられた時、天皇そこに御出ましになつた。途に堅

魚木をのせた家がある。誰の家かとお尋れになると、志幾の大縣主の家だといふ。天皇、臣下の分として天皇の御舍に似せて作つた事を怒り給ひ、之を燒かせようとなされた。大縣主は、「知らずに過つて作りましたから、」と色々にわびて、謝罪の品を獻つた。その中に白い犬に衣をきせ鈴をかけて獻つた。天皇因つて火をつける事をお止めになつた。さて若日下王の許にいらせられ、その犬を賜つた。若日下王は、「日に背いていらせられた事は畏多うございます、だから今はお逢ひ申さず、直樣參り上りましてお仕へ致しませう、」と申された。そこで天皇は大和にかへり上りたまふ時、日下山の坂の上で次の歌を詠んで、若日下王の許に遣はされた。

日下部の、此方の山奧、疊薦、平群の山の、此方此方の、山の境に、立ち榮ゆる、葉廣隱白檮、本方には、入組竹生ひ、末方には、足繁竹生ひ、入組竹、入籠は寢ず、足繁竹、慥には寢ねず、後もくみ寢む、その思妻哀れ。

天皇またある時三輪川に遊びにお出でになつた。その時一人の美しい少女が

洗濯をしてゐた。その名を尋ね給ふと、引田部の赤猪子と申す者と答へた。天皇、「汝は嫁入りをせずにゐよ、今に宮中に召し入れてやる、」と仰せられてお歸りになつた。そこで赤猪子は天皇のお召のあるのを待つてゐる内にいつしか八十年經つた。赤猪子心の内に、自分は早や老い衰へて頼みない身となつたが、お待ちして居た事をお知らせ〳〵ないではいかにも殘念でたまらぬと思つて、多くの御土産物を持つて宮中に參つた。天皇ははや忘れておいでになつて、「お前は何人か、どうして參つた、」とお尋ねになつた。赤猪子ありし次第を申しあげると、非常に驚きなされて、「おれはもう忘れてゐた。しかるにお前はこの年まで操を守つてゐたのは可愛相ぢや、」と仰せられ、妃にしようかとも思はれたが、何分老寄つてゐるのでさうもならず、御歌を詠んで賜つた。その歌二首、

御諸の、嚴白檮が本、白檮が本、忌々しき哉、白檮原少女。

引田の、若栗栖原、若閒に、寢ねてましもの、老いにける哉。

赤猪子涙を袖にかけて泣く。答へ奉つた歌二首、

御諸に、齋くや靈巫、齋き餘し、誰にかも依らむ、神の宮人。

日下江の、入江の蓮、花蓮、身の盛人、乏しきろ哉。

そこでこの老女に物多く下さつてお返しなさつた。

天皇吉野宮にいらせられた時、吉野川の邊に美しい少女がゐたので、これをお召しになつた。後また吉野にお出でになつた時、そこで琴をお彈きになつて、かの少女に舞はせなされた。その時天皇のお詠みになつた歌、

吳床座の、神の御手もち、彈く琴に、舞する女、當世にもがも。

それから蜻蛉野にお出でになつて狩獵をなされた時、虻が御腕を喰つたが、蜻蛉が來てその虻を喰つて飛んで行つた。その時お詠みになつた歌、

三吉野の、小牟漏が岳に、猪鹿伏すと、誰ぞ、大前に奏す。」安見知し、我が大君の、猪鹿待つと、吳床にいまし、白服の、袖着具ふ、手腓に、虻搔き着き、その虻を、蜻蛉早や喰ひ、此の如、名に負はむと、空見つ、大和の國を、蜻蛉島と云。

よつてこの野を蜻蛉野といふ。

天皇またある時葛城の山にお登りになつた。その時大きな猪が出て來たので、鏑矢で射給ふと、猪は唸りながら近づいて來た。天皇榛の木の上に逃げ上られた。その時お詠みなされた歌、

安見ししし、吾が大君の、遊ばしゝ、猪の憑猪の、唸畏み、我が逃げ上りし、在り丘の、榛の木の枝。

天皇又ある時葛城山にお登りなされた時、裝束から行列まで天皇と同じ樣なさまして行く者がある。天皇、「我が外に君はないに、かゝる樣をして行くは何者だ、」とお尋ねになると、彼も亦鸚鵡返しに同じことをいふ。天皇怒つて弓矢を番へ給ふと、彼も亦弓に矢を番へた。天皇、「まづ互に名告つて後に矢を放たう、」と仰せられると、彼、「我は、惡事も善事も一言できまる、葛城之一言主之大神である、」と答へた。天皇驚いて不禮を詫び、弓矢をはじめ、伴人の衣服を脫がしめて大神に献つてお歸りになつた。

天皇又袁杼比賣の許に通ひに春日にいらせられた時、途中でお逢ひ申した少女が岡の邊に隱れた。その時天皇のお詠みなされた歌、

少女の、い隱る岡を、金鉏も、五十箇もがも、鉏撥ぬるもの。

天皇又長谷の槻の下で酒宴をなされた。その時伊勢國の三重から貢つた采女が、御盃に槻の落葉が浮んだのを知らずにその儘天皇にさしあげた。天皇怒つてその采女を殺さうとなされた時、采女、「暫くお待ち下さいませ、申すべきことがございます、」と申して、詠んだ歌、

卷向の、日代の宮は、朝日の、日照る宮、夕日の、日輝る宮、竹の根の、根足宮、木の根の、根延ふ宮、八百土よし、杵築の宮、眞木栎く、檜の御門、新嘗屋に、生ひ立てる、百足る、槻が枝は、上枝は、天を覆へり、中枝は、東を覆へり、下枝は、鄙を覆へり、上枝の、枝の末葉は、中枝に、落ち觸へ、中枝の、枝の末葉は、下枝に、落ち觸へ、下枝の、枝の末葉は、蘰衣の、三重の子が、指擧せる、瑞玉盃に、浮きし脂、落ち浸漬ひ、皆凝

〳〵に、是しも甚に畏し、高光る、日の皇子、事の語り言も、此をば。

この歌を献つた所が罪を赦された。その時大后のお詠みになつた歌、

大和の、この高市に、小高かる、市の堆、新嘗屋に、生ひ立てる、葉廣、五百箇眞椿、其が葉の、廣り坐し、其の花の、照り坐す、高光る、日の皇子に、豐御酒、献らせ、事の語り言も、此をば。

天皇のお詠みになつた歌、

百敷城の、大宮人は、鶫鳥、領巾取り掛けて、鶺鴒、尾行き合へ、庭雀、群統り居て、今日もかも、酒眞漬くらし、高光る、日の宮人、事の語り言も、此をば、

この御酒宴の日、春日の袁杼比賣が御酒を献つた時、天皇のお詠みなされた歌、

水潛ぐ、臣の少女、秀樽取らすも。」秀樽取り、堅く取らせ、慥堅く、彌堅く取らせ、秀樽取らす子。

袁杼比賣の献つた歌、

安見爲し、我が大君、朝影には、倚り立たし、夕影には、倚り立たす、脇机が下の、板にもが吾兄を。

天皇御年百二十四歲。御墓は河内の丹比の高鷲にある。

清寧天皇　白髮大倭根子命は磐余の甕栗宮にいらせられて天下を治め給うた。天皇は后もおはしまさず、御子もいらせられなかつたので、崩御の後、位をお繼ぎになる方がなかつた。茲に山部連小楯、播磨の國の守であつたが、志自牟の家に來て酒宴をした。宴酣なる頃皆舞つたので、二人の火燒の童にも舞はせた。二人は互に先を讓つたが、兄先づ立ちて舞ひ、次に弟が舞ふ時次の歌を歌うた。

物部の、我が夫子が、取佩ける、大刀の手上に、丹畫き著け、その緒には、赤幡を截ち、赤幡立てて、見れば五十隱る、山の三尾の、竹を、本搔き苅り、末抽摩す如、八弦琴を調べたる如、天の下を治め給ひし、伊邪本和氣天皇の御子、市邊之押齒王の、奴末。

小楯連これを聞いて驚いて、床から轉び落ちて、二王を己が膝の上にのせ奉つて泣いた。さて假宮を作つて二王を入れ奉り、急使を大和の葛城忍海の高木角刺宮にゐられる御叔母忍海郎女の御許に奉つた。叔母君は大に喜んで、二人を迎へ取りなされた。

まさに位に即かうとなされた時、二王は歌垣に御出ましになつた。しかるに志毘臣といふもの袁祁命の召さうとなされた大魚といふ少女の手を取つた。そこで袁祁命歌ひ給ふやう、

潮瀬の、波折を見れば、遊び來る、鮪が鰭手に、妻立てり見ゆ。

これに對して志毘の臣が歌つた歌二首、

大魚よし、鮪鰭く海人よ、其が有れば、心裏戀しけむ、鮪衝く鮪。

大宮の、彼鰭手、隅傾けり。

かく歌うて後の歌の下の句を乞うた時、袁祁命の詠まれた歌、

大匠、拙劣みこそ、隅傾けれ。

なほ袁祁命の歌はれた歌、

大君の、心の寛み、臣の子の、八重の柴垣、入り立たずあり。

これを聞いて志毘臣いよ〳〵怒つて歌うた歌、

大君の、王の柴垣、八節結、結廻し、截れむ柴垣、燒けむ柴垣。

かく歌ひ爭うてその夜は別れなさつたが、翌朝二皇子は相談して兵を起して、志毘臣の家を圍んで殺し給うた。

二王子は互に天下を讓りあはれたが、兄王は弟王に、「播磨の志自牟の家で名告らなければ、こんなことにはならなかつたのだから、是非お前から先に位にお即きなさい。」と申されたので、袁祁命止むを得ず先づ位に即き給うた。

顯宗天皇　袁祁之石巢別命は近飛鳥宮にいらせられて八年の間天下を治め給うた。后難波王との間には御子がお生れにならなかつた。

天皇御父市邊王の御骨をお探しになつた時、一人の老媼がその所在を知つてゐたので、尋ね出して、蚊屋野の東の山に御陵をお作りになつた。さてお還り

になつて、かの老媼を召して、その功を褒め、置目老媼といふ名を下され、宮に入れて立派な家を作つて下され、毎日側近くお召しになつた。そのお召しになる時は、大鈴をお鳴しになつた。そこで天皇のお詠みなさつた歌、

淺茅原、小谷を過ぎて、百傳ふ、鐸搖くも、置目來るらし。

後、置目老媼ひどく年老いたから國に歸りたいと願うたので、之をお許しになり、見送り給うてお詠みになつた歌。

置目もや、近江の置目、明日よりは、深山隱りて、見えずもあらむ。

天皇、嘗て難に遭うてお逃げになつた時、御辨當を奪つた猪飼の老人を搜し出してお殺しになつた。天皇又父を殺し給うた大長谷天皇を深く怨み給うて、父の仇を報いるために、その御陵を毀さうと思うて人を遣はされる時、御兄意富祁命乞うて自らその任にあたつて出掛けられたが、その御陵の傍の土を少し掘つて歸られた。餘りにお歸りが早かつたので、「どういふ風にお毀しなさいました、」とお尋ねになると、「御陵の傍の土を少し掘つて來ました、」と答へられ

た。天皇、「何故すつかり毀していらせられぬ、」とお尋ねになると、兄王、「父の仇とはいふものゝ、また我々の叔父上であります。かつ天下を治め給うた天皇の御陵を毀すことは後の世の謗を受けませう。しかし仇は報いねばなりませんから、御陵の邊を少し掘つて、恥を見せ奉つたのであります、」と答へられると、天皇も理に服し給うた。さて天皇崩御の後意富祁命が位を繼ぎ給うた。

天皇御年三十八歳。御陵は片岡の石坏岡の上にある。

仁賢天皇　意富祁命は石上の廣高宮にいらせられて天下を治め給うた。春日大郎女の御腹に高木郎女、財郎女、久須日郎女、手白髮郎女、小長谷雀命、眞若王、次に糠若子郎女の御腹に春日山田郎女、合せて七柱の御子が坐します。

武烈天皇　小長谷若雀命は長谷の列木宮にいらせられて天下を治め給うた。この天皇御子がおありにならぬ。御陵は片岡の石坏岡にある。崩御の後品太天皇の五世の御孫袁本杼命を近江より迎へ、手白髮命に合せ奉り、位に即け奉つた。

繼體天皇　袁本杼命は磐余の玉穗宮にいらせられて天下を治め給うた。若比賣のお腹に大郎子、出雲郎女、次に日子郎女の御腹に廣國押建金比命、建小廣國押楯命、次に大后手白髮命の御腹に天國押波流岐廣庭命、次に麻組郎女の御腹に佐々宜郎女、次に黑比賣の御腹に神前郎女、茨田郎女、馬來田郎女、次に關比賣の御腹に茨田大郎女、白坂活比郎女、小野郎女、又の名長目比賣、次に倭比賣の御腹に大郎女、丸高主、耳王、赤比賣郎女、次に阿部之波延比賣の御腹に若屋郎女、都夫良郎女、阿豆王、以上七皇子、十二皇女がいらせられる。

この御世に竺紫の君石井、天皇の命に從はなかつたので、物部麁甲之大連、大伴の金村連の二人を遣して殺し給うた。

天皇四十三歲。御墓は三島の安威にある。

安閑天皇　廣國押建金日命は勾の金箸宮にいらせられて天下を治め給うた。天皇は御子がいらせられぬ。御陵は河內の古市の高屋村にある。

宣化天皇　建小廣國押楯命は檜隈の廬入野宮にいらせられて天下を治め給う

た。橘之中比賣の御腹に石比賣命、小石比賣命、倉之若江王、次に若子比賣の御腹に火穗王、惠波王合せて五柱の御子がいらせられる。

欽明天皇　天國押波流岐廣庭天皇は磯城島の大宮にいらせられて天下を治め給うた。石毘賣命の御腹に八田王、沼名倉太玉敷命、笠縫王、次に小石比賣命の御腹に上王、糠子郎女の御腹に春日山田郎女、麻呂子王、宗賀之倉王、次に岐多斯比賣の御腹に橘之豐日命、妹石垣王、足取王、豐得氣炊屋比賣命、麻呂古王、（上の と別）大宅王、伊美賀古王、山代王、妹、大伴王、櫻井之玄王、麻奴王、橘本之若子王、杼泥王、次に小兄比賣の御腹に馬木王、葛城王、間人穴太部王、三枝部穴太部王、長谷部若雀命、以上二十五柱の御子がいらせられる。

敏達天皇　沼名倉太玉敷命は他田宮にいらせられて天下を治め給うた。后豐御食炊屋比賣命の御腹に靜貝王又の名貝鮹王、竹田王、又の名小貝王、小治田王、葛城王、宇毛理王、小張王、多米王、櫻井玄王、次に小熊子郎女の御腹に布斗比賣命、寶王、又の名糠代比賣王、次に比呂比賣命の御腹に忍坂日子人太

子、又の麻呂古王、坂騰王、宇遲王、次に老女子郎女の御腹に難波王、桑田王、春日王、大俣王、以上七柱の御子があらせられる。御陵は河内の磯長にある。

用明天皇　橘豐日命は池邊宮にいらせられて三年の間天下を治め給うた。意富麗多志比賣の御腹に多米王、次に間人穴太部王の御腹に上宮之厩戸豐聰耳命、久米王、植栗王、茨田王、次に飯女之子の御腹に當麻王、須賀志呂古郎女以上七柱の御子がいらせられる。

御陵はもと石寸池の上にあつたのを、磯長の中陵に遷し奉つた。

崇峻天皇　長谷部若雀天皇は倉橋の柴垣宮にいらせられて、四年の間天下を治め給うた。御陵は倉橋の岡の上にある。

推古天皇　豐御食炊屋比賣命は小治田宮にいらせられ三十七年の間天下を治め給うた。御陵は大野岡の上にあつたのを、後に磯長の大陵に遷し奉つた。

新譯古事記　終り

274
1031

大正三年十月廿四日印刷
大正三年十月廿七日發行
大正三年十一月一日再版發行

新譯古事記
國文叢書
全

（定價金拾錢）
郵稅（金貳錢）

著作者　吉川秀雄
發行者　東京市神田區表神保町十番地　石黑專之助
印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　荻原勝次郎
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　博文館印刷所
發行所　東京市神田區表神保町十番地　文洋社書店　振替東京三九九三
賣捌所　全國各書店

終

一矢賀芳士博學文　問顧輯編

每月數篇　新譯國文叢書　逐次刊行

第一編	內坪文學士編	源氏物語	上卷
第二編	須田文學士編	元保・治平・物語	合卷
第三編	山內文學士編	太平記	上卷
第四編	伯佐文學士編	榮花物語	上卷
第五編	川吉文學士編	古事記	全
第六編	木青文學士編	落窪物語	全
第七編	巢鴻文學士編	百人一首新解	全
第八編	村野文學士編	義經記	全
第九編	川吉文學士編	萬葉集新解	上卷
第十編	木青文學士編	增鏡	全
第十一編	內坪文學士編	徒然草	全
第十二編	佐伯文學士編	今昔物語	全
第十三編	須田文學士編	曾我物語	全
第十四編	山內文學士編	太平記	下卷
第十五編	巢鴻文學士編	宇津保物語	全
第十六編	內坪文學士編	源氏物語	中卷
第十七編	村野文學士編	蜻蛉日記	全
第十八編	川吉文學士編	平家物語	上卷
第十九編	佐伯文學士編	伊勢・大和・唐・物語	合卷
第二十編	須田文學士編	枕の草紙	全

以下五十編逐續刊

定價各冊金拾錢——郵稅各金貳錢

發兌　東京神田區表神保町十　文洋社　振替貯金口座東京三九九三